



「最も必要なこと」

東京教会

土屋開夫（関東教区ジュニア部長）

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきさすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる」。

（マタイ18・3〜7）

昨年、プロテスタント宣教150周年という節目の年を越え、主のゆるしの中で新しい年の歩みが始まっています。今年、私たちはどのように歩むべきでしょうか。世の終わりと主の再臨の近い今、とにかく困いの外にいる羊たちに向かつてがむしゃらに伝道する事…、勿論それも大事でしょう。けれども、同時に私たちの内側をもう一度よく見つめ、主の前に静まって整えられる事が非常に重要ではないでしょうか。

幼子の前に立つという事は、ある面において非常に緊張感を覚える事です。なぜなら、幼子にはウソや誤魔化しがきかないからです。大人は誤魔化せるかも（？）知れませんが、巧みな言葉、偉そうな態度、本を読んで蓄えた多くの知識、そして肩書き。しかし、幼子はそれらのものには関係なく、透き通った純粋なまなこをも

って、私たちOS教師や牧師や親を見るのです。言葉で語る事とその人の実態にウソはないか、お見通しなのです。アーメンがアーメンなのかと。そして、場合によっては、つまずきや心に痛みを覚える事もあるでしょう。私たちは幼子の前に立てるでしょうか。

今、私たちに最も必要な事、追い求めるべき事は「真のきよめ」ではないでしょうか。教理としての「きよめ」ではなく、「イエス様に似る者」としての実際的な「きよめ」です。知識も賜物も必要です。しかし、最も必要な事は「イエス様に似た人格」です。幼子はそれを見て、イエス様を知り、御言を学ぶのです。

「あなたがたのうちの多くの者は、教師にならないがよい。」（ヤコブ3・1）と言われている中、私たちは教師に召されました。教師や牧師と呼ばれるようになると、いつの間にかプライドが高くなり、言葉では「ゆるし」を語りながら、プライドを傷つけた人をいつまでもゆるせないでいるという姿をよく見ます。私たちは幼子のようにならねばなりません。

やがて、私たちは「最後の審判」の時、再臨の主の前に立ちます。悔い改めるべき事を悔い改め、お互いのきよめと整えのために、さばきではなく、とりなして祈りましょう。「宮きよめ」の主は、最後の仕上げを私たちにしてください。さる事でしよう。

牧羊者

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 巻頭言 | 1 |
| 二〇二〇年度カリキュラム解説 | 3 |
| 教師養成講座「説教…子どもの心をつかむお話②」錦織寛 | 5 |
| キリストの復活 | 9 |
| 聖霊 | 24 |
| キリストの教え | 33 |
| 牧羊ひろば（羽ノ浦キリスト教会） | 48 |
| おわりに | 50 |

二〇二〇年度 カリキュラム解説

教団の聖書教育教案誌として長らく用いられている『牧羊者』ですが、二〇一〇年度カリキュラムは、特別に単年度カリキュラムとして、伝道的、基本的なカリキュラムを組みました。その趣旨をよくご理解頂き、各教会のCS現場の状況に合わせて有効に活用して頂きたいと思います。

(1) 単年度カリキュラム

従来、3年カリキュラムをベースにしてカリキュラムが組まれてきましたが、二〇一〇年度は単年度カリキュラムとなります。これは、二〇一〇年度限りの予定で、二〇一一年度以降は3年カリキュラムに戻す方向で考えています。

(2) 伝道的・基本的カリキュラム

近年、『牧羊者』は「聖書教育教案誌」として、子どもたちへの働きのみならず、成人科や礼拝、祈禱会での利用なども視野に入れながらカリキュラムが組まれてきました。実際、教団諸教会において幅広い用い方がなされていることを伺っています。しかし、一方では、カリキュラム内容が子どもたち、特に初めて教会学校に来た子や、最近来始めた子どもにとっては、難しい内容が続くこともありました。

そういう中、「より伝道的、基本的な内容を」、「開拓的なCSでも用いやすいものを」との声をしばしばお聞きして参りました。このような声を受けて、教会学校局では、開拓的教会学校向けのカリ

キュラムが検討されてきました。

二〇〇七年度から始まった3年カリキュラムが二〇〇九年度で終了することを受け、二〇一〇年度カリキュラムを検討するに当たり、このような流れを意識しました。その結果、二〇一〇年度カリキュラムを単年度カリキュラムで、伝道的、基本的な内容とする方針を取ることにした次第です。

前局長時代に作成された開拓的教会学校向けのカリキュラム案をもとに、二〇一〇年度カリキュラムの作成がなされました。その結果、伝道的、基本的内容を中心とした特色あるカリキュラムとなったのではないかと思います。

まず、伝道的内容についてですが、神・罪・キリスト・救いに関する内容、信仰決心に招く内容など、伝道的内容が半分以上の割合となっています。

また、残りの内容も、信仰生活を進めていく上で欠かせない基本的な内容に絞っています。また、聖書箇所としては、従来教会学校で親しまれてきた聖書箇所を厳選するように心がけました。

開拓的な教会学校はもちろん、長年続けられてきた教会学校でも、もう一度基本に立ち返り、救霊の年、救いの原点を明確にする年、基本的養育の年として位置付けて頂くならば、最適なカリキュラムとして受け止めて頂けるのではないかと考えています。

(3) カリキュラムの流れ

伝道的、基本的カリキュラムを組むに当たり、様々な組み方を検討しましたが、結果的には以下のような原則に従ってカリキュラムを組みました。

① 旧新約聖書の流れを重んじたカリキュラム

開拓的な教会学校では、いつ初めての子どもが教会学校に来るか分かりません。伝道的内容と信仰生活に関する内容とが分かれているよりも、適宜交互に出て来るカリキュラムの方が、柔軟な対応が可能と思われます。

そこで、まずは旧新約聖書の流れを大切に、その流れに沿ったカリキュラムを考えました。その結果、このカリキュラムを一年通して学んだ場合、旧新約聖書のおおまかな流れもつかみやすくなるのではないかと思います。

但し、旧約聖書が長く続くと、バランスに欠ける面も生じると考え、旧約聖書の学びを2回に分け、それらを新約聖書の学びの中に組み入れた形にしました。

② 基本的教会暦・行事を踏まえたカリキュラム

次に、どこの教会学校でも踏まえられている基本的な教会暦・行事は、踏まえるようにしました。まず、クリスマスに向けてのアドベント。次に、

イースター、ペンテコステは、内容を連続させ、一連のカリキュラムとしました。また、毎年繰り返し利用されるケースも想定し、カリキュラムの最後を受難週に向けてのものとしました。

その他、母の日、花の日、父の日、年末感謝、新年礼拝は、カリキュラム内容に反映させました。但し、収穫感謝の日は、今年アドベントに重なることもあり、今回のカリキュラムには含みませんでした。

③ その他

以上に加え、テーマによる単元として、「神」についての単元を加えました。

(4) 単元の区切りについて

従来、単元は月ごとに区切られてきましたが、自然なカリキュラム区分となるように、月ごとの枠を取り払いました。

(5) 暗唱聖句の重視

今回のカリキュラム編成においては、暗唱聖句も重視しました。み言葉そのものの中に、人を造り変える力があることを覚え、できるだけ暗唱するのにふさわしい聖句、子どもたちの信仰生涯を支えるようなみ言葉が選ばれるよう、カリキュラム編成上も苦心しました。

幼稚科暗唱聖句は、あまり長くなりすぎないよう、適当な区切りを入れましたが、一般の暗唱聖句は、多少長くなっても、み言葉そのものがメッセージ性を持つことができるように、過度に文を区切ることがないよう配慮しました。このため、多少暗唱聖句が長くなっている週もありますが、全部覚えることが力となると思いますので、子どもたちを励まして頂ければと思います。

(6) 継続して繰り返し使用することが可能

今回のカリキュラムは、今回限りの単年度カリキュラムとする予定です。二〇一一年度以降は3年カリキュラムに戻す方向です。引き続き、できるだけ基本的な内容となるように心がけていきたいとは思いますが、二〇一〇年度カリキュラムに比較すれば、信仰者向けの内容の比重が増すこととなります。そこで、開拓的教会学校などで、今

回のカリキュラムを継続して繰り返し用いて頂けるよう工夫しました。(その場合の使い方は、最後の「付記」参照。)

(7) テーマと目標

これまでのカリキュラムで表示されていた「週題」を取りやめ、「テーマ」としました。この「テーマ」は、その週のメッセージの主題を明確に表わすものです。また、メッセージ例の「タイトル」は、この「テーマ」の方向性の中でつけられます。ですから、「テーマ」と「タイトル」は、内容は同じですが、字句は必ずしも同じではありません。より子どもたちに届く「タイトル」を執筆者の先生方に考えて頂いています。

また、テーマと暗唱聖句、目標は、一本の筋が通ったものとなるように努力しました。これにより、メッセージの方向付けがより明確になったのではないかと思います。

このカリキュラムのもとで執筆されることとなります。聖書講解、メッセージ例、ワーク等も、一本の筋が通ったものとなることを目指しています。今後、執筆の進行に合わせて、執筆者の先生方と協議しながら、努力して参りたいと思います。続いてお祈りください。

付記 毎年繰り返し利用頂く場合の使い方

今回のカリキュラムを毎年繰り返し利用頂く場合、問題になるのは、毎年時期が移動する受難週、イースター、ペンテコステへの対応です。そこで、繰り返し用いて頂く場合は、カリキュラム番号52が

受難週メッセージとなり、受難週イースター、ペンテコステは、カリキュラム内容が連続するようになりました。カリキュラムで「月日」のところ、太字で囲んだ部分(二〇一一年度では、4/4・5/23、3/13・3/27の11週分)は、受難週の2週間からペンテコステまでのひと続きのカリキュラムです。この部分が、毎年移動する部分となります。(以下、これを「移動カリキュラム」と呼ぶことにします。)

イースターが今回カリキュラムより早くなる場合は、カリキュラム番号49以前のカリキュラムが飛ばされて、移動カリキュラムに移ることになります。早く始まった分、移動カリキュラムは早く終ることになります。その後、空いた部分に飛んだ49以前のカリキュラムが入ることになります。

イースターが今回カリキュラムより遅くなる場合は、カリキュラム49以降、何週間分かが空くこととなります。これらの週は、9以降のカリキュラムを入れて頂きます。その分移動カリキュラムが遅く終了しますので、その後は、続きのところからカリキュラムを進めて頂くことになります。

例えば、二〇一一年度も引き続き利用頂く場合、二〇一一年3月6日より、次のような順番でカリキュラムが進むことになります。49、9、10、11、(以下移動カリキュラム)50、51、52、1、2、3、4、5、6、7、8(以上移動カリキュラム)、12…。

ワーク、フラッシュカード、中高科へのヒント、み言葉カード等、二〇一一年度での月日を表示する以外に、カリキュラム番号を明示しています。二〇一一年度以降、繰り返し用いて頂く場合は、カリキュラム番号を見ながらお用いください。

「説教…子どもの心をつかむお話（2）」

― 拡大する教会学校！ ―

日本ホーリネス教団 東京中央教会 錦織 寛 にしこおり ひろし

二つの質問をしたいと思っています。

①あなたの教会の子どもたちは教会学校を楽しんでいるでしょうか。それとも、我慢して付き合いで出ているでしょうか。

②そして、皆さんは教会に行くのが楽しいですか。

一、クリスチャンホームの子どもたちにとって教会は楽しいか

（1）そもそも教会は楽しいところなのか、それとも忍耐を学ぶ場なのか？

うちの子たちも、調子が悪くなるというか、虫の居所が悪くなると、いろいろ暴言を吐いてくれます。「お父さん、ボクはね、一週間に礼拝に出て、そして祈禱会に出て、あと家で家拝なんかやって、全部で何回もこういう集会がある、これ全部出たんだよ、お父さん」なんて言うんですから。「いや、それはなあ、本当にかげがえのない恵みじゃないの」と話をするわけです。でもその恵みが恵みとして受け取れないこともあるかと思えます。

クリスチャンホームの子どもたちは、教会に来るのが当然だというふうに使われていますけれど、決して当たり前のことではありません。クリスチャンホームの子どもたちは、本当にがんばっているいい子たちです。いっぱいほめてあげてほ

しいと思います。

私は自分がクリスチャンホームに育って、教会学校が楽しかったという思い出があまり無いんです。だんだん年齢が上がつてくると友達も教会学校に来なくなり、男性で教会学校に行ってるのは私ぐらいになりました。中学くらいになつて、幼稚科から中学生まで一緒に礼拝守つていて、中学生であるにもかかわらず、「さあ皆さんお遊戯をしましょう」と先生に言われて、「俺、これからお遊戯すんの？」。大学生ぐらいになりますと、お遊戯だろうが何でもできるようになるわけですが、でもやっぱり多感な年齢というのがありますよね。

自分が教会学校の先生をするようになったときに、自分が教師会に出て、そこで話されていたのはこういうことでした。「クリスチャンホームの子どもたちはなかなか手がかかる。扱いにくい。み言葉すれしている。み言葉慣れしている」。そこではクリスチャンホームの子どもたちが問題児だったんです。

私はそれを聞きながら、「それはないよ」と、クリスチャンホームの代表として思ったわけです。日曜日には他の子たちはいろんなことで遊んでいて、面白いことも色々やっている中で、クリスチャンホームの子どもたちは、一生懸命教会に来て

いるのですから。

基本的にはやっぱり教会は楽しいところだと思います。子どもたちにとって教会は楽しいところで、イエス様のお話っていうのはわくわくするような話なんです。私たちがこの命の言葉を預かって、子どもたちに語るときに、それを「この話、前にも聞いたからつまらない」っていうふうに子どもたちに言わせるとしたら、私は悔しい。やはり私たちは、教会学校を楽しみたいところ、子どもたちにとって魅力あるところにしたい。それは最終的にはみ言葉による魅力ということではありますけれど、み言葉の魅力が魅力に感じられなくなってしまうような、妨げみたいのがあるとしたらできるだけ取り除きたい。集まった子どもたちが、「あー楽しかった、また来週も行きたいな」って気持ちになつて帰ってほしい。教会が忍耐を学ぶ場になつてはいけないと思います。

（2）クリスチャンの子どもたちのタイプ

クリスチャンホームの子どもたちにはいろんなタイプがあります。

①健やかな魂型

ほんとに健やかで、何の疑問も持たず、すぐくくと成長していく、そういう子もいます。

②じつと我慢の子型

必ずしも教会に行くのは楽しくはないんだけど、親を悲しませたくはないから我慢してる子たちっていますね。そういう子どもたちは、いつか爆発する可能性が、多少あります。

③病める魂型

最初から、親に反抗して、「教会なんかいくもんか、教会学校なんかつまんない」って言う子どもたちです。そういう子どもたちも、小さい頃に聞いた聖書のお話はちゃんと残っていますから、ある意味で折りながら待つてあげたいと思います。

(3) なぜクリスマスチャンホームの子どもたちにとって教会が苦痛か

クリスマスチャンホームの子どもたちにとって、教会が苦痛であるとしたら、何故だと思います？（しばらく参加者からの発言が続く。以下、それらの発言を受けて）どうにもならないこともあれば、どうにかなることもあります。

「朝が早い」とか、「しんどい」というのはどうしようもないんですけど。特に中学生の女の子で携帯持つと、夜が確実に遅くなりますね。

「いい子でないといけない」という見方は、教会学校で話されているメッセージが、ひよつとした律法的な部分がすごく大きくて、「こうならないといけない」というメッセージが強く子どもたちの中に伝わってしまっているかもしれない。

私が大学生くらいになったときに、自分が罪深いなっていることを感じて、「よし、今度からもう罪を犯さないぞ」と決心をしました。決心をしても三日くらいしかもたないんですね。「命をかけて」と誓っても同じで、その時は「死ぬしかないかな」と思いました。

そんなことを色々やりながら、最後に私に神様が語ってくださったのは、「あなたが罪を犯さなくなったらあなたを愛したんじゃないよ。あな

たが完璧だから、あなたがいいやつだから愛したわけじゃないよ。あなたが罪人であったとき、あなたが私に背を向けて私に敵であったとき、あなたの身代わりになって私が十字架についたんだよ」。わたしは「あーそうなんだ」と思いました。それはほんとに私にとって大きな転機でした。

「本音と建前」というのは本当にそれで、子どもたちは大人の姿を見えています。大人が本当に礼拝喜んでる？教会行くの楽しいの？クリスマスチャンホームの親が、家で牧師や教会学校の先生の悪口とか言ったら絶対アウトですね。本当に本音と建前が同じという姿を、子どもたちは教会の大人に期待しています。

「羽目をはずせない」…どうか、羽目をはずさずであげてください。ギター弾いたっていいし、ドラムたたいたっていいし。親や先生が窮屈なキリスト教ではなくて、リラックスした神様の恵みを伝えられればと思います。

「僕の休みを返してくれ」…本当なんです。子どもたちが楽しい企画をぜひ教会学校で考えてください。何か自分たちが参加できるような、ギターを弾いたり、野外活動とか、いろんなことを考えていかないと、教会学校の子どもたち、かわいそうかなと思います。

「習慣はいや」ということでは、ある意味で子どもたちの期待を裏切る工夫っていうのが必要だと思います。子どもたちが予測もしなかったような楽しいことがそこで起っていく。子どもたちをどう驚かせてやろうかと、こちらも子どもになつて

考えられるといいですね。

「じつと座っているのはいやだ」というのは本当だと思います。小学生なんかはじつと座っているのはいや。難しいのは、「じつと座っているのはいや」と言った同じ子が、「じゃあ立って何かやろう」と言うのと、「かつたるい」と言って座ってる、というのがあるんだけど、難しいんです。その子その子の姿を見ながら、やはりその子のことを理解してあげなきゃいけない。

「話が長い」というのは、良くないです。子どもたちの集中力を見ながら短くしてください。だからと長い話をしていると、その後の分級も押せ押せになってしまいますから、全体のプログラムを見ながらぜひ話は短くしてください。

「同じ年代がいらない」。一つは教会の色々な人たちが、一人の子どもに声をかけてくれるのは大変かなって思います。教会学校の子どもを育てるのは教会の働きですから、教会学校の先生以外のいろんな年代の人たちが、教会に来ている子どもたちに、「よう！おはよう」、「こんにちは、よく来たね」、「元氣だね」って、いろんな声をかけてくれること、とても大事だと思います。

「意見が聞いてもらえない」とか、「個人的なケアがほしい」。子どもたちの話を是非聞いてください。子どもたちって話してくれないんじゃないかって、私たちが聞かないから話してくれないだけの話です。子どもたちの話を、ほんとに子どもたちと同じ目線に降りていって、話を聞いてあげる。

そして、すぐに結論出さない。「そんなのダメよ、

らっしやって、要は次が肝心なんです。礼拝でも、初めての時に歓迎してくれたからと思つて、「じゃあもう一回くらい行こうかなあ」と思つて来る、ところが、「二回目の時は誰も声かけてくれなかった」と帰つていく。二回目が大事です。

子どもたちもそう。一回目いろんなスペシャルに来てくれた、その子どもたちに次、いつ来てもらうか、その来たときにどういうことを計画するか。単発ではなくてせめて二連発ぐらいを狙つてやるとういかなと思います。

たとえば季節ごとにやつていくつていうのもいいですよ。スペシャルだけ来る子どもたちでもいいじゃないですか。教会に来たことがある子どもたちは、おそらく大人になつてからも教会怖くなくなりますから。

⑤ クリスチャンホームの子どもたちと地元の子どもたちにかけ橋をかける

クリスチャンホームの子どもたちは、案外遠くから親と一緒に車で来てたり、電車で来てたりする。地元にはないクリスチャンホームの子どもたちと、地元の子どもたちとが、何とかうまくないでいくことが出来るように工夫していくのは大事です。

⑥ 子どもたちが参加できる教会学校を――企画もゆだねてみよう

教会学校の司会なんかは子どもにゆだねたらいいいんじゃないですか。献金係だけじゃなくて、奏樂だとか、司会だとか、中学生になったらやりますけれど、小学生のうちから少しずつ出来る子どもたちもいるんじゃないかと思ひます。キャンプだとか

お泊り会の企画を、教師会だけで立てるんじゃないくて、子どもたちと一緒にたてられたら、子どもたちはますます燃えてくるんじゃないかなと思ひます。

⑦ 子どもたちの話をよく聴くこと

子どもたちの話、よく聴いてください。

⑧ 子どもたちと遊ぶこと

子どもたちと遊んでください。私たちはみ言葉で勝負すると申し上げました。だけど、同時に子どもたちと一緒に遊ぶつて大事なことです。

今、教会の壮年の方々に私がいつもお願いしているのは、こういうことです。「青年たちと遊んでください。青年たちにおごつてやつてください。青年たちをボウリングかなんか連れて行つて、そこで壮年の人たちがお金を出して遊ばせてやつてください。とにかく青年たちとお友だちになつて、青年たちと話が出来るようになって、青年たちの話を聞いてやつてください。青年たちを育ててやつてください」ということをお願いしています。

子どもたちの場合も同じだと思ふ。子どもたちと遊ぶ、大人が子どものようになつて、子どもたちと楽しむということですね。

⑨ 本物を見せよう

本音と建前が同じつていうこともつながってきます。本物を見せてほしい。神様を本当に信じてるんだ、神様を本当に礼拝してるんだということ、大人が子どもたちに見せていく。

⑩ 子どもを育ててくださる主に信頼し、一人を育てる

十把一絡げじっばひとかりでということではなくて、一人ひとりの子どもたちを育てていく。

⑪ やっぱり最後はみ言葉で勝負する

最後はみ言葉で勝負する。なんだかんと言つても、最後はみ言葉を子どもたちにしつかり手渡ししていく。恵みの言葉として。

⑫ 小さい者、弱い者を大切に

イエス様ご自身が、「最も小さい者の一人にしたのは私にしたんだ」つておっしゃった。教会の中で小さな子どもたち、弱い立場にある人たち、そういう人たちに温かい教会でありたいと思ふ。

四、ふりかへ

ところで、あなたは教会学校が楽しいですか。ぜひ、楽しんでほしいと思ふ。楽しくつてたまらないつていうのがあつたら、それは子どもたちにも伝わっていくんじゃないでしょうか。

「あなたと会えて嬉しいよ。俺はおまえのことが大好きだよ」ということを、子どもたちに伝えられることは大事。それは、イエス様が同じようにして子どもたちを愛し、また私たちのことを愛してくださつてゐるからです。

「福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである」(Ⅰコリント9・22〜23)。私たちも、教会学校の先生たちとして「どんなことでもする」と、覚悟を決めたいと思ひます。私たち自身も、「神様つて何て恵み深いお方なんだろう」ということを、そのことを通して経験していくためです。

(二〇〇九年四月二九日「兵庫教区CS教師研修会」にて)

聖書 マタイ28・1～10 テーマ 復活による勝利

序論

(水川)

キリスト教信仰の礎石は復活にある(中沢啓介)。主の復活は歴史上の事実ですが、福音書の記述には、細かな点で食い違いが見られます。聖書記者たちは、互いの記事を調整しようとせず、聖霊の導きに従って、それぞれの得た資料に基づいて記述しました。これにより復活の目撃者の驚きや混乱の様がわかります。それほど主の復活は、当時の人々に衝撃を与えた出来事であったのです。神が、私たちの救いのために用意してくださった御業は、人知をはるかに越えた出来事だったのです。

一、墓に行った女性たち

(ほかのマリア)とは、ヤコブとヨセフの母マリヤ(27・56)。ほかにサロメ(マルコ16・1)、ヨハンナ(ルカ24・10)等がマグダラのマリヤと共に、主が葬られた墓に行きました。それは主イエスのお体に香油処理をするためでした。彼女たちは、まだ誰も葬った事のない(27・60)アリマタヤのヨセフの墓に、葬られたのを確認しました。そして香料と香油とを用意して安息日を休みました(ルカ23・56)。ですから、まさか祭司長たちが、安息日中にピラトに働きかけ、墓に番人を置いた事は知らなかったでしょう。

心を悪意に占領されてしまう時、律法の番人であるはずの彼らが、安息日律法を無視して、自分

たちの都合を優先していることに、気づきません。さらに、不正な裁判を取り繕おうとして、国家権力を用いて、信仰に生きる弱い女性たちの前に立ち塞がっているのです。

二、御使いの顕現

彼女らは、「だが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」(マルコ16・3)と困難を承知で出かけます。非力を認めつつ、神の助力を信頼する信仰者の姿をここに見ます。神はこのような信仰を喜ばれます。(すると、大きな地震が起った)。御使いの御業は、神の信仰者に対する応答に違いありません。

番人たちが、恐れあまり死人のようになった事も、立ちほだかる国家権力を退かせた神の守りの事も、女性たちは気づかずにいたのかも知れません。私たちにも、自分では気づかずにいる神の守りの御手がどれほどあるか、後になって気づく事があります。

以前、大きな航空機事故があった時、私たちは青年全国大会の参加者を、神戸港で待っていました。事故の情報が流れた時、事故機に参加者が搭乗している可能性がありました。実は一便前の飛行機には搭乗していたのです。予定者が全員そろった時の安堵感は今でも忘れられません(申命記33・27)。

三、恐れることはない。よみがえられた。

墓に行った女性たちに語られた御使いのメッセージは、「恐れることはない。…かねて言われたとおり、よみがえられたのである」でありました。

主イエスの予告(16・21、17・23、20・19)どおりに、よみがえられました(サムエル下22・31)。

新約聖書では、イエスの復活は、イエス自身の業ではなく、一貫して神ご自身の御業として描かれています(ロマ8・11、10・9)。御使いは(さあ、イエスが納められていた場所をあらわさない)と空の墓を指し示します。なぜ墓が空であることが復活の有力な証拠になりえたのでしょうか。

① 墓は岩を掘って造られた物で(27・60)正面しか出入口はなく、その上、そこには屈強な番人が見張っており遺体を持ち出すことは不可能です。

② 墓は、過ぎ越しの祭りの参加者(100万人以上)が埋め尽くす中にありました。誰にも知られずに主の遺体を移動することは、事実上不可能なのです。

③ イエスの弟子たちが、遺体を盗み出したとの話には無理があります。番人にも、民衆にも気づかれずに、弟子たちが主の遺体を墓から持ち出す事はできません。夜中光りも灯さず、誰にも知られずに、数人がかりで行動できるはずがないからです。しかもほとんどの人たちがイエスに敵対している最中なのです。誰かが主の遺体を見つければ、主の復活の証言は直ちに覆されるのです。しかし、覆す証拠を誰も挙げられなかったのです。

結論

主イエスは、全人類のための贖いを成し遂げた証拠として、復活されました。キリストと共に十字架につけられた私たちは、罪赦され、キリストと共に新しい命に生きる者とされたのです。

研究資料

(中島)

福音書の記者たちは、イエスの復活の場面を直接には描いていない。最初の証言は、空の墓（ミナト）という証拠を伴った、天的な存在による報告である。もちろん墓が空でなければ、教会がイエスの復活を信仰の中心に据えることは不可能であった。しかし空の墓は、信仰のきっかけとはなっても、逆の立場の論拠にもなり(28・13)、それだけでは復活の確固たる証拠にはならない。復活のイエスと会った者の目撃証言が不可欠なのである。その最初の証人となったのが女性たちであった。彼女らがその時代背景において、福音の最初の伝達者に選ばれたことは驚きである。もし福音書が創作であったならば、この重要な役割は、決して女性には託されなかったであろう。聖書の女性観は、その時代の女性観をまったく覆すものであったのである。逆説的であるが、このこともまた、イエスの復活と、それにまつわる聖書の記述の信頼性を力強く証しするものであると言えるよう。

テキスト

1 安息日が終って 安息日は土曜日の日没をもって終わる。しかし女性たちは安全と視界確保のために、週の初めの日の明け方 まで待たねばならなかった。マグダラのマリヤ すべての福音書で復活の最初の証人として挙げられている。ほかのマリヤ 「ヤコブとヨセフ」(27・56、マルコ15・40では「小ヤコブとヨセフ」)の母マリヤであろう。さらには「クロパの妻マリヤ」(ヨハネ19・25)と同一かも知れない。墓を見に来た 亡骸（なきがら）に香料を塗るため(マルコ16・1)であろう。

2 主の使が：石をわきへころがし 女性たちが墓に入るためであって、イエスが墓から出るためではない。その上にすわった 死の象徴である墓石の上に座することは、死に対する勝利をあらわす。

4 見張りをしていた人たち 祭司長たちの意向を受けて墓の番をしていた(27・62・66)。恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった 大きな地震に加えて、光り輝く御使いの姿は、彼らを恐れさせるに十分であった。体が硬直し、気絶したのである。死人の番をしていた彼らが死人のようになり、彼らが守っていた死人が死からよみがえったことは、極めて皮肉なことであった。

5・6 恐れることはない 直訳すると「彼らのように」あなたがたまで恐れてはならない。十字架におかかになったイエス：もうここにはおられない 死者の中にイエスを見出そうとするならば、彼らのようになる。捜す場所はどこではない。よみがえられたのである 直訳は「よみがえらされたのである」(受動態)。動作主は、言うまでもなく神。イエスの復活は父なる神のみわざなのである。かねて言われたとおりに イエス自身が復活を予告していた(16・21、17・23等)。イエスが納められていた場所を知らなさい 御使いは女性たちに、イエスの体がそこになんことを確認させる。しかし復活への信仰は、空の墓という事実だけから起こるものではない。そのため、後にイエスがご自身を現してくださいるのである。

7 弟子たちにこう伝えなさい 女性たちは御使いから、弟子たちへのメッセージを託された。イエスは死人の中からよみがえられた 「神によつ

て」よみがえらされた「(6節と同じ)。これこそが教会の信仰告白の礎石である。あなたがたより先にガリラヤへ行かれる： 26・32参照。イエスもすぐ後で同じことを語る(10)。あなたがたに、これだけ言うておく 以上の言葉が、神からの權威ある啓示であることを強調している。

8 恐れながらも大喜びで 女性たちはなお恐れつつも「非常な喜び」(2・10と同じ)で満たされた。急いで墓を立ち去り 御使いの「急いで行つて」(7)という命令に、その通り応答した。

9 イエスは彼らに出会って： 女性たちへの復活のイエスの顕現は、この福音書のクライマックスの一つである。彼女たちは、復活の主を最初に目撃するという特権にもあずかったのである。イエスのみ足をいだいて拝した イエスが復活されたという事実だけでなく、復活がイエスの言葉と活動とを立証するものであるゆえ、女性たちはイエスを礼拝せずにはいられなかったのである。

10 イエスは彼らに言われた： 御使いと同じメッセージを、イエスご自身も女性たちに託した。兄弟たちに イエスはたびたび弟子たちを兄弟と呼びかけた(12・50、25・40、ヨハネ20・17等)。ここで見落としてはならないのは、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた後にもかかわらず、彼らを「兄弟たち」と呼び続けておられることである。ここにも神の大きな愛と赦し（ゆるぎ）が表されている。

参考文献 注解書 D. A. Hagner(WBC), D. Hill(New Century Bible), 等。その他 C. S. Keener, The IVP Bible Background Commentary: NT.

| | |
|------|-------------------------------|
| 聖書 | マタイ28・1～10 |
| タイトル | 空っぽの墓 |
| 暗唱聖句 | イエスは死人の中からよみがえられた。 マタイ28・7 |
| 目標 | キリストの復活による勝利を経験する者となる。 |

導入

(松浦み)

ペットと一緒に暮している人はいいますか? 「犬のきもち」「猫のきもち」という本が出ました。人間の言葉をもたないペットと、どのようにして心を通い合わせるかが書かれていますよ。もし、このかわいいペットが死んだらどうでしょう。また、家族の中でだれかが亡くなったという経験をした人はいいますか? 悲しくて心にぽっかり穴があいたような気持ちになることでしょうか。今日は、そんな悲しい気持ちで心がいっぱいになってしまった人のお話をしましょう。

お墓に急ぐ人たち

イエス様が金曜日に十字架にかけられ亡くなられてから3日目の朝早く。そう、4時頃のことでしょうか。あたりはまだ真つ暗で、空には星が瞬いてるようなところのことです。マグダラのマリヤと他の女の人たちが、イエス様の葬られた墓に向かつて急いで歩いて行きました。なぜ、そんなに朝早くにお墓に行ったのでしょうか。女の人たちは恐くなくなつたのでしょうか? 女の人たちは墓を訪ねて、イエス様のお体をふいてきれいにしようと考えていたのです。ユダヤの国では安息日に働くこと

が禁止されていたので、週の初めのできるだけ早い時間を待ち構えて出かけたのです。愛するイエス様のお体は鞭打たれ、十字架で苦しまれ、血みどろで傷だらけだったでしょう。それをきれいにするために、いい匂いのする油のつぼを小脇に抱えて急いでいたのです。真つ暗でも恐くはありません。でも一つだけ心配なことがあったのです。イエス様のお墓の入り口には、人の背ほどもある大きな石が転がしてあって、とうてい自分たちだけでは動かすことは出来ません。『だれがお墓の入り口の石を転がしてくれる人がいるかしら』と話しながら、真つ暗な道を急ぎました。その時です。ドーン! と地響きがして地震が起こったのです。女の人たちはキヤーと叫びながらも、なおよろよろした足取りでイエス様の墓へ近づいて行きました。

天の使いのみ告げ

するとどうでしょう。墓につくと、墓の入り口の大きな石は転がされ、その上には天の使いが座っていたのです。その姿は光輝き、まばゆいばかりです。その衣は雪のように真つ白です。周りには暗いのに墓の入り口だけは真昼のように明るく輝いています。よく見てみると、墓の番人たちは気絶して、死んだように倒れています。み使いは女たちに向かってこう言いました。「恐れることはありません。あなたがたが十字架におかかになったイエスを捜していることは、わたしにわかつています。もう、ここにはおられない。よみがえられたのだ。さあイエスが納められていた場所をこらんなさい」。近づいて見ると墓は空っぽです。み使いは続けて言いました。「さあ急いで行って弟子たちにこう伝

えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお会いできるであろう』と。女の人たちはもうびっくりして口もきけません。転がるように、急いで弟子たちに知らせに走って行きました。

空っぽの墓

なぜ、み使いは天から降りてきて石を脇に転がし、その上に座つたのでしょうか? イエス様が墓から出るのを助けるためだったのでしょうか。いえ、そうではありません。イエス様はよみがえられて、墓の中にはもういらつしやいません。人々に「墓は空っぽだよ。もうここにはおられないよ」ということを知らせるためだったのです。空っぽの墓は、よみがえりのしるしでした。また、十字架による罪の赦しの確かなしるしでもありました。イエス様は信じる人々の罪を赦し、死に打ち勝つ力を与え、墓を全く空っぽにして、新しい歩みをさせてくださる方なのです。

私たちは失敗したり、悩んだり、迷ったり、行き詰まったりすることがありますね。もう、生きているのがつらいと思う人もいますでしょう。でも、イエス様を信じる時に、私たちはリセットされて、新しい歩みを始めることができるのです。空っぽの墓にはそんな素晴らしいことを保証する力があります。なぜなら、空っぽの墓はイエス様がよみがえって、今も生きておられることのしるしなのです。あなたもこのイエス様を信じて、復活の勝利の力を与えられ、生き生きと歩んで行く者となりましょう。

♪主は生きておられる♪ (リビングプレイズ16)



聖書 ルカ24・13～32

テーマ 心の目を開かれて

序論

(水川)

今日のところは、一般に「エマオの途上」とか、「エマオの道」と題されています。主題は「心の目を開かれて」です。主イエスの復活という事は主イエスの処女降誕以上に、受け入れ難い出来事です。実は、エマオの途上の二人の弟子たちも、主イエスの復活ということに対して心を開いていたとは思えません。甦りのイエスとの親しい交わりや、食事を共にする中で、復活の祝福の中に引き入れられた物語です。復活のイエスのほうから、心の目を開いてくださった恵みの証です。

一、目がさえざられていた弟子たち

この日(主の甦りの日)、恵みの座から悲しそうな顔をして、遠ざかっていく人たちがいました。彼らは、主が甦られたとのメッセージを聞いていたのです(23)。でも、甦りのメッセージは、彼らに喜びをもたらしませんでした。迫害下に教会を誕生させ、歴史を変えていく、あの爆発的な力が沸き上がってこないのです。実に不思議なことです。

先年、私も空の墓(聖墳墓教会)を訪ねてきました。墓が空である事実、主の復活を記念する数々のレリーフ等を見ましたが、それで、自分を変える程の力を体験できませんでした。復活の信仰とは、人間が様々な知恵を尽くし、墓の空っぽであることや、他の人の体験談を聞いたこと

で確かめられることではないのかも知れません。今、生きておられる主イエスにお会いすることによって、初めて道が開かれることでしょう。

福音が伝える主イエスの甦りについては、甦られた主イエスのほうからいつも近づいて、ご自身の復活の事実を証しておられます。目がさえざられている不信仰を取り除いていただくべきなのです。

二、目を開いてくださる主イエス

悲しみつつ恵みの座から遠ざかる弟子たちを、主イエスは無視されません。「イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた」のです。

彼らの心は、十字架につけられたイエスのこと、墓に行つた数人の女性たちが伝えた空の墓のこと、「イエスは生きておられる」との御使いのメッセージに占領されていたのです。けれども主イエスの甦りの命には、満たされていませんでした。

私たちの間にも、同じようなことはないでしょうか。十字架と復活に関する研究が盛んになされながら、命の躍動につながつてこないのです。しかし、そんな時にも、私たちに語りかけるお方がおられるのです。

かつて、殺人の上に放火して証拠の隠滅を謀つた人を拘留所に訪ねたことがあります。彼は無罪を裁判で主張していたのです。訪問帰りに、新約聖書を差し入れ、読んで祈ることを約束させました。一週間後、再訪問した時、彼の態度は一変していたのです。無罪の訴えではなく、「イエス・キ

リストが十字架にかけられたことと、復活されたことが聖書に書かれていました。私は神様に罪を告白しました。そして殺めた人が天国に入れられますように、毎日祈っています」と言うのです。彼は、控訴を取り下げ、素直に刑に服し、新しい歩みを始めました。神が彼の心を目覚めさせ、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰に導かれたのです。

主ご自身が、聖書全体を説き明かし、福音の真理に目覚めさせてくださったのです。エマオの弟子たちは、この恵みを体験したのです。私たちも心を開いて、主のお働きに耳を傾けるのです。

三、目が開けて、イエスがわかった

み言葉が説き明かされた時、心が内に燃え始めました。それは後になつて気づくほどの、静かな経験でした。しかし、この穏やかな火は人生を変え、世界を変えるほどに確かなものでした。み言葉がわかり始めたのです。み言葉が示す主の恵みによつて彼らの心が開かれ、イエスであることがわかったのです。主イエスのお姿が見えなくなつても揺るがない確信が、彼らの心を占領したのです。

結論

研究の成果としての知識ではなく、私たちに語りかけてくださっているお方のみ言葉を聞き得る心の目を開かせていただきましょう。生徒に教えることに勝つて、復活の主を証しする者として、用いていただきましょう。

研究資料

(中島)

ルカ福音書も、イエスの復活の場面を直接には描いていない。御使いたちが女性たちにイエスの復活を宣言し(6)、それを聞いた彼女たちが他の弟子たちに知らせた(10)。ここに登場する二人の弟子も、彼女たちからそのことを聞いていた。にもかかわらず、その心はなお暗かったのである。

テキスト

13 ふたりの弟子 一人の名はクレオパとある(18)。ヨハネは十字架のそばにクロパ(＝クレオパ)の妻マリヤがいたと記す(19・25)。それがもう一人の弟子かもしれない。エルサレムから七マイル約12km。エマオという村 正確な位置は不明。ヨッパへの途上にアムワスという地名があるが距離が32kmもある。エルサレムの西のアツマワスは距離が6kmと半分しかない。もしかしたらルカは往復の距離を記したのかもしれない。

15 イエスご自身が近づいてきて 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。信仰も神からの賜物なのである(エペソ2・8)。

16 彼らの目がさえぎられて イエスの容貌が以前と変わっていたのではない。マグダラのマリヤの場合と同様(ヨハネ20・15)、霊的な理由で、彼らはイエスに気付かなかったのである。

21 イスラエルを救うのはこの人であろうと この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主で

あり、その望みはイエスの死によって、消え去っていた。**きょうが三日目なのです** 彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのであろう。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。

22・23 わたしたちの仲間である数人の女が 10節に記されている女性たち。彼女たちは御使いを通してイエスの復活の予告を思い出し(8)、墓が空であることの意味を悟った。そして喜びをもつてそのことを使徒たちに伝えたのであるが、彼らはそれを信じなかつたのである(11)。

24 イエスは見当りませんでした 墓が空である事実を弟子たちは確認していた。だがその事実も、死者の中にイエスを捜す者には、失望しかもたらさないのである(先週の研究資料を参照)。

25 預言者たちが説いたすべての事 間違つたメシヤ(キリスト)理解が、間違つたイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となつた。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシヤ理解を弟子たちに語つたのである。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入る これが預言者の指し示すキリスト像であつた。苦難は、栄光のために必要な筋道であつたのである。しかし当時のユダヤ社会にメシヤと受難を結びつける思想があつたかどうかは疑問である。むしろ一般的には、受難は国家・民族と結びつけられ、メシヤはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者からはじめて 旧約

聖書は律法(モーセ五書)、預言書、諸書(詩篇など)の三つに分類される。**聖書全体にわたり**の「聖書(グラフィス)」は「諸書」の意もあるが、ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 なお先へ進み行かれる様子であつた このようにして相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀になつたことであつた。

29 しいて引き止めて 旅人へのもてなしは宗教的にも高位の美德であつた。夕暮になつておりその日のメインの食事をする時間。5千人の給食も「日が傾きかけた」(9・12)頃であつた。

30 パンを取り、祝福してさき 普通はその家の主人がする作業。それをイエスが行つたのである。これは弟子たちに、前述の5千人の給食、さらに最後の晩餐(22章)を思い出させたであらう。

31 彼らの目が開けて その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、彼らはずいにイエスを認めるに至つたのである。するとすぐにイエスは見えなくなつたが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかつた。

32 お互の心が内に燃えたではないか 単なる心の高揚ではなく、それ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなつた」と訳す(これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を思い出させる)。この弟子たちのように、後代の信者たちもまた、よみがえられた主の臨在を認めるところから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

参考文献 注解書 E. E. Ellis (NCB), I. H. Marshall (NIGTC), J. Nolland (WBC). その他 C. S. Keener, The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書
タイトル
暗唱聖句

ルカ24・13〜32

心を燃やしてくださるイエス様
彼らの目が開けて、それがイエ
スであることがわかった。

ルカ24・31

目 標
霊の目が開かれて主を見る者となる。

導入

(松浦み)

春を迎えました。死んだような木々に花が咲き、若葉が芽を出しています。小鳥のさえずりも聞こえるでしょう。でも冬の間はそうではありませんでした。まるで死んだような枯れ枝でした。私たちの心もこれに似た光景がありますよ。うれしくて喜びが満ちている時は、春のような温かい心ですが、人を憎んだり、いじめたり、悲しみや不安でいっぱいのは時は、冬のように心が凍って、カチンカチンになってしまいます。そうなると周りが見えなくなつて、ますます落ち込んでいつてしまうことがあるのです。

エマオに行く途中で出会った人

イエス様がよみがえられたその日の午後、二人の弟子が、エルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。イエス様の弟子たちは、生前イエス様から、「わたしは十字架で死ぬけれども、復活するよ」と聞かされていました。しかし、イエス様の十字架というショックな出来事で、心は凍りつき、恐れと不安と失望でいっぱいのカチンカチン状態でした。ですから「イエス様がよみがえられた」というニュースを耳にしても、「まさか、そんなことあるわけないよね」と信じられ

ないでいました。二人はエマオの村を目指しながら、この日に起こったことなどをいろいろ話しながら歩いて行きました。その時、そつと二人に近づいて、一緒に歩き始めた人がいました。しかし、二人はその人がだれなのかわかりません。その旅人が弟子たちに尋ねました。「さっきから何のことを話しているのですか？」二人は悲しそうな顔をして立ち止まり、クレオパという名の人が「あなたはエルサレムで起こったことを知らないのですか」と驚きながら言いました。二人は口々にイエス様のことを話し始めました。「自分たちの先生が、何も悪いことをしないのに、十字架にかけられたのです。それからもう3日目になりました。その上仲間の女の人がお墓に行ってみると、お墓が空っぽで、天使が『イエスはよみがえりました』と言ったのです。それで仲間の者が確かめるために墓に走つていくと、本当にイエス様のお体が見当たらなかったそうです。弟子たちの話を聞くと、その人はため息をついて言いました。「ああ、心の鈍い人たちだ。キリストは必ず苦しみを受けてよみがえるはずではなかったか」。そして聖書の中から色々と解き明かしてくれました。

イエス様に気付く

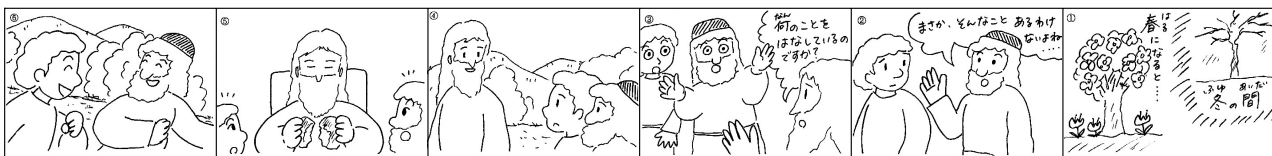
そんな話を聞きながら歩いていくうちにエマオの村に近づきました。その人はまだ先に行きそうだったので、二人は「もうすぐ暗くなります。どうぞこちらにお泊まりください」と引き止めました。三人が夕食の席についた時、その旅の人が祝福の祈りをしてパンを裂き渡した時、二人は初めて気付きました。「あつ、イエス様だ！」そう思ったとたんに、イエス様のお姿は見えなくなりました。

た。二人の目が開かれたのです。「あつ、そうか。そういうば、途中で聖書のお話を聞かせてくださった時、私たちの心が燃えて喜びがいっぱいになったね。」二人は「イエス様は、ほんとうによみがえられて生きておられる」とはつきり分かりました。彼らはうれしくて小躍りしながら、喜びにあふれ、元来た道を引き返して帰って行きました。

例話

イギリスにジョン・ウエスレーという素晴らしい先生がいました。先生が子どもの時、家が火事になり、もう少しで焼け死ぬところでしたが、危機一髪で助かりました。それで先生は自分のことを「火の中から取り出された燃えさし」と呼びました。やがて勉強をして牧師となり、イギリスだけでなくアメリカにも行つてお話をしましたが、人々はお話に耳を傾けることなく、先生は心傷つき、失望落胆して帰ってきました。その年のことです。ある集会でお話を聞いている時、先生の心は、不思議に温まり、燃え上がったのです。そしてただ、イエス様だけが罪から救ってくださる方であることが、ほんとうに分かったのです。それまでも、イエス様が全人類の救い主だと言うことを知ってはいました。しかし、お話を聞くうちに、心の目が開かれ、このイエス様こそが、自分の救い主であることがはつきり分かったのです。その時以来、先生の心は熱く燃え上がり、生涯をかけてイエス様をの宣べ伝える人に変えられたのです。イエス様は今も生きておられます。あなたの心の目が開かれ、心燃やされて、イエス様と共に歩むことができるように祈りましょう。

♪祈つてごらんよわかるから(新聖歌四八一)



聖書 ヨハネ20・24～29 テーマ 見ないで信じる幸い

序論

(水川)

共に集う場（礼拝）に一緒にいなかったトマスは、生きておられる主の顕現に浴する機会を逃してしまいました。礼拝を欠席した結果に伴う失態です。「わたしは主にお目にかかった」と証しする同僚の言葉がわからない。霊的顕現ではなく、体の伴った復活体ということが理解できない。このトマスの叫びを、主イエスは聞いてくださったのです。トマスも集う場に、復活の主が再び顕現くださった。そして、み言葉を聞いて信じる信仰の神髄に、世のキリスト者を導いてくださったのです。

一、彼らと一緒にいなかったトマス

トマスがなぜ他の弟子たちと一緒にいなかったのか不明です。殉教の覚悟のできていた（11・16）トマスは、他の弟子たちがユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた時、一人町に出て食料の確保が、町の様子を見るため外出していたのだと考える人もあります。ライルは「十分な理由もないのに神の民の集まりから離れることは、いつも賢明でない」と手厳しい見方のあることを紹介しています。確かに共に集う礼拝の場で、生きている主の臨在に触れる事は事実（マタイ18・20）です。トマスの痛みを繰り返さないようにしたいものです。

二、戸惑うトマス

「わたしは主にお目にかかった」と証しする弟子たちの言葉を信じられないトマスは、イエ

スを信じられなくなったのではありません。体の伴う復活ということが理解できないのです。それは、人が確認できる領域を超えた内容だからです。トマスのこの戸惑いは、現代の私たちの課題でもあります。墓が空で、遺体が見当たらない状況証拠や、私たちはお目にかかったという証言があったとしても、体の伴う復活となると理解できないトマスの正直さに、軍配をあげたくなるのではないのでしょうか。「私は、その体に十字架の痕跡（きずあと）を確

認しなければ、決して信じません」とこのトマスの正直な訴えに、同感できるところがあります。トマスは、主の復活を肯定したいために、確かな証拠を手にしたかったのではないのでしょうか。

三、トマスの求めに応えられる主

トマスは、彼をだましたり陥れたりする動機を全く持たない、親友10人の証言を信ずることを拒否しました。これはとても悲しいことです。

これは、私たちがどんなに意をつくしてイエスの神であることを証言しても、信仰に導けないむなしさを体験した時のことを思い出させます。このような時、「弟子は、トマスに証しをし、彼の不信を取り除きとう御座います。主はこの弟子と共に働いてトマスにご自身を現し給います」とバックストンは解説しています。

いつも自分の手と目で確認できない物を信じられない、トマスのような人は多いのです。重体の中風患者をイエスの所に連れて来た人たちの熱心さをご覧になられた主は、中風患者の罪を赦し、病を癒されました。10人の弟子たちは、かたくなに信じることを拒むトマスを、非難したり排斥し

たりしていません。一週間後の日曜日、彼らはトマスと共に家の内で集います。前週の礼拝の再現です。戸を閉ざした家の中に主イエスが入って来られ、中に立ち、「安かれ」とみ声をかけてくださいました。

私は受洗して一年目、新生の恵みを頂いたにもかかわらず、罪に勝てない自分に悩まされました。聖餐礼拝で、今日は聖餐を断ろうと決心して臨んだのです。「これは私たちのために裂かれた主イエス・キリストの御体です」との聖餐式文の言葉を耳にした時、十字架の主の臨在に包まれたのです。「こんな罪人の私のために、身代わりとなって十字架におかかりくださった主イエス様、感謝します」とパンとぶどう汁を押しいただきました。逆転の祝福でした。

「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい」。トマスはイエスに答えて言いました、「わが主よ、わが神よ」。トマスはイエスの復活体に接して、ただ彼が甦り給うたという事実を信じただけではなく、もっと深く、イエスの神性に対する信仰を告白したのです。そしてこれは、この福音書の冒頭にある「言は神であった」という宣言に相応するものです（高橋三郎）。

結論

トマスの信仰告白は、これ以降の信仰者、すなわち、すべてイエスの姿を見ず、イエスの弟子の言葉による宣教によつて、信じて救われる者たちの初めとなったのです（1ペテロ1・8～9）。「御使たちも、うかがい見たいと願っている事である」（12）この祝福に与っている事を感謝しましょう。

研究資料

(中島)

テキスト

24 デドモと呼ばれているトマス デドモはギリシャ語名、トマスはアラム語名で、いずれも「ふたご」の意。共観福音書では名前だけの登場だが、本書では他に2回その言動が記録されている(11:16, 14:5)。そこから垣間見えるのは、忠誠心に富むが、悲観的な人物像である。イエスがこれたとき、彼らと一緒にいなかった トマスだけ不在であった理由は不明。悲嘆に暮れる時、仲間と慰め合うのを好む人もいれば、一人で過ごしたい人もいる。悲観的なトマスは後者であったのかも決して責められることではないだろう。

25 その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ トマスがこのように言うのは、弟子仲間が彼を説得するべくイエスの肉体の様子について詳細に語ったからだろう。トマスは、彼らは何かを見たことを疑っているのではない。問題は何を見たかである。彼は、弟子仲間が幻影や幽霊といった実体(肉体)のないものを見たと考えたのである。決して信じない 「疑い深いトマス」というレッテルを貼られるゆえんだが、程度の差はあれ、女性たちの報告に対して弟子仲間がとった態度と根本的には変わらない。トマスとて、その場にいれば信じていたはずなのである。

26 八日のち ユダヤでは起点の日も含めて数えるので、7日後、すなわち次の日曜日である。

27 あなたの指をここに付けて…信じない者にならないで、信じる者になりなさい 復活のイエスは、霊だけではなく、手で触れる肉体を持つ存在である(ちなみに教会が直面した初期の異端思想はキリストの肉体を否定する仮現説であった)。イエスはトマスが弟子仲間と言いつつ放ったことをご存知であったので、見るだけでなく、手で触つて確かめよと招かれたのである。もちろんこれは単なる勧めではなく、信仰へのチャレンジである。

28 わが主よ、わが神よ 復活の主を見、またその声を聞いたとき、その体に触れるまでもなく、トマスの心の奥底からこの言葉があふれ出た。これは単なる呼びかけではなく信仰告白である。しかも抽象的な神学的定義ではなく、「わが」という人格的な告白である。イエスこそ神であり、自分は僕としてその真の神に喜んでお仕えする、との決意表明なのである。意外にも、神という表現がイエスに用いられる場面は極めて少ない(1:1、テトス2:13、ヘブル1:8、1ヨハネ5:20)。そのうちの一つ、「言は神であつた」という本福音書の最初の宣言がこのトマスの信仰告白によって確認づけられるのである。その意味で、この信仰告白は、本福音書の頂点と呼ぶことができる。一度は復活を疑った者が、よみがえった主に対する最高の信仰告白を言い表したのである。

29 あなたはわたしを見たので信じたのか イエスは必ずしもトマスを非難しているわけではない。他の弟子たちもみな、見るまでは信じなかったのであり、彼らがトマスよりも一週間早く信じたのは、一週間早くイエスを見たからである。しかし重要

な点はそこではない。見て信じるのが、見ないで信じることよりも劣るわけではないし、反対に、見ることができないのは不幸だということでもない。重要なことは、トマスや他の使徒たちのように復活の主を見る特権にあずかる人たちもいるが、教会の歩みの中では、大多数がそうでない人たちだということであり、そして、その後者も決して不幸ではなく、幸いなのだということである。見ないで信ずる者は、さいわいである よって「うな人たちは、さいわいである」で有名な八福の教え(マタイ5章)と同じ形式で、イエスはこうのように語るのである。使徒たちの時代が過ぎ去れば、すべての信者は、見ないで信じてはならない。それがなぜ幸いなのかというと、聞いて信じることができるからである。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」(ローマ10:17)。ヨハネはこのことを知っていたからこそ、「キリストの言葉」、すなわちキリストの物語を、福音書に著したのである。その目的は読む者が信仰に至るために他ならない(31)。トマスは最初の日曜日に不在であったことで、実質的に、よみがえりのイエスを見ることのできない後世のクリスチャンたちと同じ位置にあつたのである。この福音書を読んだ最初の読者たちは、イエスを見なかったが、信じた。同様に、現代の読者たちもまた、イエスを見ないが、信じることはできるはずなのである。

参考文献 注解書 G.R. Beasley-Murray (WBC), F.F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), 他 IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書 ヨハネ 20・24・29

タイトル えっ！ うっそ、ほんと?!

暗唱聖句 見ないで信ずる者は、さいわいである。 ヨハネ 20・29

目標 見ないで信じる者となる。

導入

(松浦み)

「みなさん、今から目をつぶってください。今、先生は手に聖書を持っていますが、みなさんには見えませんね。先生が言うことを信じるしかありません。それじゃあ、目を開けてください。ほら、本当に聖書を持っていたでしょう。」私たちは見ないで信じることもできますが、実際に見たら、もっとよく分かりますね。

イエス様にお会いしなかったトマス

先週も学んだように、イエス様はよみがえられたお姿を、よく分かるように弟子たちに見せてくださいました。しかし、イエス様が亡くなられた後、弟子たちは、「今度は、私たちが同じように捕まえられて、殺されるかもしれないな。」「どうしよう」とガタガタ震えながら、戸を閉め鍵をかけた部屋に集まって、縮こまっておりました。すると、イエス様がスッと部屋に入ってきたら、「平安があるように」と言われ、十字架の釘跡のある手と脇とを見せられました。弟子たちは主を見て大喜びしました。ところがその時、12弟子の一人トマスはその場に居合わせませんでした。しばらくして、外から帰って来ると、他の弟子たちが口々に

に「私たちは主にお会いしたよ」と言っても、「えっ。うそだろう!」と全然信じようとしません。「おいおい、お前たち、気が変になつたのかい。死んだ人が生きかえるなんて、そんなバカな話があるか。私は手に釘跡を見、私の指をその釘跡に差し入れ、私の手をそのわき腹にさし入れてみなければ、絶対信じないぞ」と言い回りました。

トマスに会われるイエス様

それから一週間たちました。その日も弟子たちは戸を閉め、部屋の中にいました。今度はトマスもいます。イエス様は鍵のかかった部屋の中にスツと姿を現され、「平安があるように」とおっしゃいました。それからトマスのほうを向いて、「トマス、あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れて見なさい」と自分で確かめるようにうながされました。トマスは触らなくてもよく分かりました。すぐ床にひれ伏し、「わが主よ、わが神よ」と答えたのです。すると、イエス様は、「トマス、あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃいました。

見ないで信じる者

イエス様は、トマスを責めておられるのではありません。「トマス、信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と、見ないでも信じることの大切さを教えてくださったのです。イエス様のよみがえりは「えっ! うっそ」とだれでもが思う事柄ですが、本当のことなのです。

今、私たちは目でイエス様を見ることはできません。どうしたら、今も生きておられるイエス様

を信じることができるのでしょうか。それはみ言葉による以外にありません。聖書には、復活の主に出会った人々の真実な証が書かれています。また、復活の主に出会って人生が変えられた多くの人々の信仰の足跡が残されています。それらを通して、心からイエス様を信じることができるのです。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。」(1ペテロ1・8)と聖書に書かれています。イエス様は、トマスとのやり取りを通して、後に生きる私たちのために、「見ないで信じる者は、さいわいである」と言ってくださいたのですね。

私たちの歩みのなかでも、見ないで信じるさいわいが多くあります。あなたはひまわりの種を植えるでしょう。やがて、夏になると背丈も伸び、大きなひまわりの花を咲かせることを信じますね。どんな花が咲くかなと思っただけで、うれしい気持ちになるでしょう。反対に、こんな種からあの大きなひまわりが咲くはずがないと思いますか。

聖書に書かれていることは本当です。目に見えない神様が、聖書を通して語ってくださいているのです。66巻の旧約聖書、新約聖書には、イエス様が神の独り子としてこの世に来てくださったこと、十字架にかかつて救いの道を開いてくださったこと、信じる者に永遠の命が約束されていることが書かれています。「えっ! うっそ!」と言われないで信じる者になってください。そうすれば、あなたの生涯は神様の愛と恵みに満ちるでしょう。
♪主イエスとともに♪ (こどもさんびか118)



聖書 ヨハネ21・15～19 テーマ わたしを愛するか

序論

(水川)

ガリラヤ湖畔には、主が弟子たちと食事をした岩（主の食卓）を包み込むようにして、聖ペテロの召命教会が建っています。教会のすぐ前には、半円形の野外ステージがあります。私はかつて、ここでイエスがペテロに「あなたは、わたしを愛するか」と語りかけた事を思い、しばし祈りの時を持ちました。「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」（マタイ26・35）と誓ったペテロの失態を、私たちも知っています。甦りの主は、他の弟子たちの前で、ペテロの再召命の時を用意されたのです。

一、イエスは、シモン・ペテロに言われた

主は食事を済ませ、くつろぐ弟子たちの前で、ペテロに語りかけられました。「あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。新改訳聖書の欄外には、イエスが「愛」（アガパオー）で語りかけ、ペテロは（フィレオー）で答えたと解説されています。アガパオー（神的愛）とフィレオー（人情・友愛）だと説明されてきました。十字架前のペテロは、どの弟子よりも強い愛をもって、主を愛していると確信していました。最後の晩餐で「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言おう」と予告されたとおり、ペテロは、主を裏切つてしまいました。自責の念に

苦しむペテロに、再起の機会を与えようと、主はご配慮くださったのです。「ペテロお前はわたしをアガパオーで愛しておりますか？」「主よ、私がフィレオーで愛していることは、あなたがご存知です」。同じ言葉で二度繰り返し返され、三度目には、「ペテロお前はわたしをフィレオーで愛するか」。「そうです。私が主をフィレオーで愛しているのは、おわかりです」。ペテロは、三度も繰り返し尋ねられました。怒らず、「心をいため」ました。これは真実の悔い改めの証拠（バックストン）です。「主よ、あなたはすべてをご存じです」、ペテロは主の御前にすべてを打ち明け、すべてを明け渡したのです。主が求められたのは、この全権委譲です。ペテロは自分のことは、自分よりも主の方がよく知っておられる事を、悟ることができました。

二、わたしの羊を養いなさい

甦りの主は、真の悔い改めに導かれた者に「わたしの羊を養いなさい」と任職の油を注がれたのです。「羊」は、主にとって最も価値あるものです。「わたしは羊のために命を捨てる」（ヨハ10・15）。今、ペテロの手に、この尊い羊を委ねるということです。罪深さと弱さを自覚する者に対して、復活の主は、ここまで信頼を置いてくださるのです。「神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである」（Ⅱコリント5・18～19）。ペテロをこ

のように信任されるお方は、あなたをも教会学校教師として、信任してくださいます。ペテロのように、高慢な心を捨て去り、全権を主に明け渡して、主に仕えることが大切です。主が命がけて愛されている、子どもたち一人一人の魂を、私たちは愛をもって養って参りましょう。

どのように子どもを愛したらよいのか、戸惑いを覚えている教師もおられるかも知れません。『実を結ぶ教会学校』金井由信著（ベラカ出版）の第三章『CS教師の心得』を読む事を勧めます。勿論、「愛は、神から出たもの」（Ⅰヨハネ4・7）ですから、神に祈ることは言うまでもありません。

あるCS教師は、話すのが大の苦手、一週間良く準備して来られるのに、分級で話し出すと5分で終わってしまうのです。努力を重ねても5分話すと、もう種が切れてしまうのです。ところが彼の祈りには力があり、生徒が次々に増えていくのです。生徒のために涙を流して祈る祈りは、生徒の魂に共鳴して、魂を生かしていくのです。この教師は、ペテロがこの時に体験した恵みを、自分のものとする事ができたのだと思います。

結論

張り切つてCS教師を励む中で、やめていく生徒が現れる時、打ちのめされる経験をいたします。主は、失望するペテロに再召命の言葉をかけられたと同じく、「わたしの羊を養いなさい」と呼びかけています。全権委譲して、主を愛し、生徒を全力で愛して、立ち上がり励みましょう。

研究資料

(中島)

他の弟子たちもいた前節までと大きく雰囲気が変わり、ここではペテロだけに焦点が当てられる。

「(愛) 弟子がついて来るのを見た」(20)とあることから、おそらくイエスがペテロを食後の散歩に誘ったのであろう。そんな一対一の状況で、イエスはペテロの魂を取り扱われた。それは、主との関わりを3度も否定したことで失意のどん底にあったペテロのために、イエスが用意された、なくてはならない回復のプロセスだったのである。

テキスト

15〜17 あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか ここでイエスは、ペテロの愛の深さを、他の弟子たちと比べてどうかと問うているのではない。むしろそれを比較し、誇っていたのはかつてのペテロであり(マタイ26・33)、その自信は「あなたのためには、命も捨てます」(13・37)と豪語するほどであった。イエスはそんなペテロに、今でもそのように言えるか否かを探られるのである。**わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じます** しかし、現実の主を否んではまったペテロには、かつてのような宣言をすることは到底できなかった。けれども、彼のイエスを愛するという思いが偽りでないことも、また真実であった。そんなペテロの思いをイエスは、彼のうちから引き出してくださったのである。

ちなみにこのやり取りの中で、[ア]アガパオー(神の愛に代表される無条件の愛を表すことが多い)と[フ]イレオー(友愛を表すことが多い)の2種類

の動詞が「愛する」の用語として用いられている。イエスは最初の2回を[ア]アガパオーで「愛するか」と尋ね、それらに対しペテロは[フ]イレオーで答えた。そして3度目にイエスは[フ]イレオーで尋ね、ペテロが[フ]イレオーで答えたのである。今日、多くの学者はこれらの用語の違いを重要視しない。その根拠は、少なくともヨハネ文書においては、両者が各所で相互可換的に用いられていること、そしてヨハネが類義語を同義で用い、多彩な表現をすることを好むからである。しかしそれは「愛する」の用語の違いに着目する解釈や説教(少数派ながらこの立場に立つ有力な神学者もいる)の可能性を否定するものではない。ただし、より重要なことは、イエスが愛について、ペテロに3度繰り返し問われたということである。それは、ペテロの3度の失敗に呼応するものであるが、決して懲らしめのための執拗な追及ではない。それはペテロの愛の応答を3度導き出すものであって、その目的はペテロの回復に他ならない。このように繰り返しの問い続けるイエスの姿こそ、ペテロの存在の奥底まで彼を捜し求められる、良き羊飼いととしてのイエスの姿なのである。**わたしの小羊を養いなさい** その大牧者なるイエスが、ペテロを小牧者に任命される。イエスは、ご自身に従う牧者を通してその宣教の働きを進められるのである。なお「わたしの羊を飼いなさい」(16)、「わたしの羊を養いなさい」(17)は、表現は多少異なるが、内容は同じと考えてよい(前述のヨハネの表現の特色による)。後にペテロは同じ表現を用いて、「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧し

なさい」(1ペテロ5・2)と長老たちに勧めている。心をいためて「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22・32)。自らの失敗を直視し、打ちのめされる経験と、そこから一方的な主の恵みによって回復される経験は、ペテロが教会を牧会していく上で、不可欠なものであった。

18〜19 自分の手をのばす 十字架刑を指す一般的な表現だが、ここでは十字架を刑場に運ぶために背負うことを指すという解釈もある(順番的にはこの方が理にかなっている)。ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くこれは執行人による刑場への連行を指すのだろう。

どんな死に方で、神の栄光をあらわすか ここに、はっきりとペテロの殉教が予告されている。しかしそれは悲劇ではなく、神の栄光があらわされるときなのである。神はイエスの死を通してご自身の栄光をあらわされた(17・1)。同様に神は、イエスの名のために苦しみを受ける者を通して、栄光をあらわされるのである(1ペテロ4・16)。**わたしに従ってきなさい** イエスが「わたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになる」(13・36)と予告されたことが、この命令によって成就した。さらには「あなたのためには、命も捨てます」(13・37)とのペテロの宣言が、遅ればせながらも、ついに果たされるのである(実際にこの福音書が著された時期には、ペテロは既に殉教の死を遂げていた)。

参考文献 4月18日分に同じ。

聖書
タイトル
暗唱聖句ヨハネ21・15～19
胸キュンのイエス様との出会い
あなたはこの人たちが愛する以上
に、わたしを愛するか。

ヨハネ21・15

目 標
罪を赦し回復させてくださる主
を知り、主を愛する者となる。

導入

(松浦み)

あなたは取り返しのつかない大失敗をしたことがありますか？そんな時、がつくりと氣落ちして、食事をすることも、人に会うことも嫌になつてしまつてしまう。

ある時のことです。クラス旗を作ることにになりました。デザインを考える人、色を塗る人とみんなで手分けして作業をします。完成間際のことでした。一人の不注意で絵の具がこぼれ、せつかくのクラス旗が台無しになってしまいました。みんなの顔は青ざめました。締め切りは明日だったのです。失敗した子は小さくなって「ごめん、ごめん」というばかり。クラスのみんなは後少しというところだったので、カンカンに怒っています。その時です。一人の子が言いました。「初めのデザインとは違うけど、汚れた所をこんな風に変えようよ。大丈夫だよ」と言いました。失敗した子はどんなにほっとし、胸がキュンとなつてうれしくなつたことでしょう。

あなたはわたしを愛しますか

ガリラヤ湖畔でイエス様と一緒にの食事が終つた時、イエス様がペテロを呼んでおっしゃいました。

「ペテロ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。即座に「はい、イエス様。わたしがあなただけを愛することは、あなたが存じます」と答えました。ペテロは以前「イエス様と一緒になら死んでも恐くない」とみんなの前で言い切つたことがあります。ところが実際にイエス様が捕まえられると、恐くなって逃げてしまいました。それだけではありません。イエス様のことを三度も「そんな人は知らない」と言つてしまったのです。一度口から出てしまった言葉は、取り消すことができません。ペテロはどんなに後悔していたことでしょう。復活されたイエス様と食事をしながらも、そのことが頭から離れなかつたにちがいありません。そんなペテロの心の内を存じのイエス様は、ペテロに目を留め、優しく問いかけられたのです。そしてペテロに「わたしの小羊を養いなさい」とおっしゃいました。またもう一度ペテロのほうを向いて「わたしを愛するか」とおっしゃたので、「主よ、そうです。わたしがあなただけを愛することは、あなたが存じます」と言いました。三度目に「ペテロ、あなたはわたしを愛するか」と言われたので、ペテロは心を痛めて、「イエス様、あなたは私がしたことも、私の心も全部存じます。私がイエス様を愛していることは、イエス様、あなたが存じます」と一生懸命答えました。イエス様はペテロがイエス様を愛していることをよく存じでした。ペテロに三度「愛しています」と言わせることを通して、ペテロを赦していることを教え、励まそうとなさつたのです。なんと優しいイエス様でしょう。胸がキュンとなりますね。そればかりでなく、ペ

テロに新しい仕事をお任せになつたのです。

わたしに従いなさい

「ペテロ、よく覚えておきなさい。あなたは若いときは自由に歩くことができます。でも、年を取ると他の人があなたを捕まえて自分が行きたくない所に連れて行かれるでしょう」。イエス様は、ペテロがこれから、どのように新しい仕事に取り組んでいくか、苦しい目にあうか、どんな最期を遂げるかをご存じだったので。そのペテロに向かって、イエス様は「わたしに従てきなさい」と、おっしゃいました。もちろんペテロは、それから、どんなに苦しくても逃げ出さないで、喜んで従いました。ペテロの胸は、失敗を赦してくださつたイエス様の愛を思い出すたびに、キュンと熱くなつたのです。そして、どんな困難も乗り越える力を与えられたのです。言い伝えによると、ペテロは、最期の時、イエス様と同じ十字架刑にあつたといわれていますが、「イエス様と一緒にでは申し訳ない」と、逆さに十字架につけられ、殉教の死を遂げたといわれています。ペテロはどんなに深くイエス様を愛していたことでしょう。

あなたは失敗した時、自分の弱さに悩む時、どうしますか？ 私たちは間違いを犯すことがあります。が、失敗を失敗で終わらせないイエス様に、信頼しましょう。イエス様の十字架を仰ぎ、イエス様を信じて歩んでいきましょう。イエス様から「わたしを愛するか」と聞かれたら、「イエス様、あなたを心から愛しています」、「私はあなたに従ていきます」と、お応えできる者となりましょう。

♪主よ終わりでまで♪(讃美歌21・510 1節)



聖書 マタイ28・16～20 テーマ 共におられるキリスト

序論

(大頭)

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを「疑う者もいた」。しかし、イエスは疑う者も含めて「彼らに近づいてきて」くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいてくださるのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。(ヨハネ20・27)とおっしゃってくださったことを思い出そう。

二、宣教のご命令

「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」主イエスは「それゆえに」宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによつて父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのでは

ない。それがたとえ地の果てであっても、また日本のような偶像の国であっても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である「弟子とし」、「父と子と聖霊との名によつて、彼らにバプテスマを施し」、「命じておいたいっさいのことを守るよう」に教えよ」は、いずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通していよいよ神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に「父と子と聖霊との名」というときの名は単数であり、神の三位一体性を示している(新改訳聖書欄外註)。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは「ペリコーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現されてきた」(マクグラス「キリスト教神学入門」445頁)。バプテスマによつてキリスト者は、ご自身交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによつて、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」(21節)とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは「いつもあなたがたと共に

にいる」と約束された。^(へんざい)遍在(どこにでも存在すること)は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリストは「そのからだなる教会のかしらである」(コロサイ1・18)。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをもたしていてくださる。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たち自身がはなだ不完全で恥じるようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主はお選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってくださって、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光榮あるわざをご自身の権威をもつて可能とし、ご自身が共にいてくださることによって続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しし続ける者となろう。

研究資料

(宮澤)

単元「キリストの復活」の締めくくりとして、大宣教命令が与えられている。この箇所は、二重の意味での結末を持っている。マタイによる福音書そのものの結末としての意味づけと、マタイによる、主イエスの復活の終わりとしての意味づけとしての結末である。その意味で、ここは重要かつ難解な箇所である。

テキスト

16 十一人の弟子たち ユダの死を計算に入れた数字（マタイ27・5）。ガリラヤ 復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この箇所とヨハネ21章に述べられている。 **イエスが彼らに行くように命じられた山** 具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、「山」は神的顕現の象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている（マタイ4・8、5・1、15・29、17・1）。それゆえ、この「山」がどの「山」かと問うことはここではあまり意味がない。

17 拝した 礼拝した（新改訳）。**疑う者もいた** この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者」が誰なのかで、この箇所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「ある者は疑った」（新改訳）と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パ

ウロが「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた」（Ⅰコリント15・6）という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によって、信仰に導かれる者となお疑う者とは分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている（この箇所と14・31）ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18 権威 イエスへの権威の与え主は父なる神である。イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」（マタイ4・8〜10）と、ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここにおいて、イエスは十字架への道を決然と進んで行かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通じてこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20 イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行って、すべての国民を弟子とすることである。この箇所では、**すべての国民** とあるが、特筆すべきはマタイがイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言うことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた（参考10・5〜6、15・24）が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復

活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名によって** とは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との生きた交わりに入ることを表わす。また、後者の **教える** とは、教え続けるという継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておいたいっさいのこと** とあるように、山上の垂訓を始めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである** マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信仰者と共にいる（インマヌエル）お方として描いているということである（1・23、18・20）。マタイのイエスは、徹頭徹尾インマヌエルで貫かれているといってもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるとは、主イエスが信仰者と共にいてくださるからである。

最後に、この箇所に「すべての」「いっさいの」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書 デイヴィッド・ボッシュ「宣教のパラダイム転換上」（東京ミッショナリ研究所）、他

聖書 マタイ28・16～20

タイトル 一緒にいてくださるイエス様
暗唱聖句 見よ、わたしは世の終りまで、
いつもあなたがたと共にいるの
である。 マタイ28・20目 標 共におられる主を信じて、主を
証しする者となる。

導入

(飯田)

新しい学年になり一ヶ月が過ぎましたが、少し慣れましたか？クラス替えのあったお友だちは、新しいお友だちが出来たでしょうか。もしかしたら、この連休にどこか一緒に遊びに行く人もいるかも知れません。もし、皆さんの友だちが「いつまでも離れずに、友だちでいよう」と言ってくれたらうれしいと思います。

では、イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？イエス様は心から私たちに「いつも一緒にいるよ」と約束してくださいます。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつもでも一緒にいる」と言ってくくださるのでしょうか？それは、みんなを心から愛していてくださるからです。皆さんも大好きな友だちといつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちに自由するために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝って復活してくださいました。そして、弟子たちの前に自分が復活し

た事を現してくださいました。でも、弟子たちの中には、復活を信じる人と疑う人がいました。皆さんはイエス様の復活を心から信じていますか？「ビミョク!?」って言う人がいますか。イエス様の復活を信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。イエス様は、皆さんがイエス様の復活を信じる事を願っておられます。

イエス様を伝える

復活されたイエス様が、弟子たちに「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊の名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいことを守るよう」に教えなさい」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるものです。イエス様は、弟子たちにイエス様の事をすべての人に伝えなさいと命令されたのです。私たちが愛し、力と恵みをいっぱい与えてくださるイエス様を、自分だけのものにしておいても良いでしょうか。

皆さんは、嬉しいことや楽しいことがあったら友だちやお父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず言ってしまうと思います。そのように、私たちは復活されたイエス様を多くの人たちに伝えて行きましょう。イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われていることです。そして、イエス様は皆さんがイエス様の事を一人でも多く人たちに伝えて行くことを期待しておられるのです。

イエス様は共におられる

弟子たちにとってイエス様を伝えるに行くために、助けになったことは何だったでしょうか。それは、

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」と言う約束でした。イエス様は弟子たちだけに宣教に行かせて「わたしは知りません。あとは頼みます」と弟子たちにすべてを任せられたわけではありません。イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終りまでいつも共にいてくださるのです。イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、心の中で「もうすべてが終わりで」と思ったに違いありません。

イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで復活され、彼らの前に現れたのです。そして「世の終りまで共にいる」と言われたのです。この言葉を聞き、弟子たちはどのように思ったでしょうか。イエス様の復活を信じた者にとっては非常に大きな喜びであったに違いありません。皆さんは、自分を裏切った人といつまでも一緒にいられるでしょうか。イエス様が弟子たちに言われたこの言葉を今朝、同じように皆さんに言われます。皆さんがイエス様の事を思う時も思わない時も、どんな時もどんな場所でもイエス様は、いつも共にいてくださるのです。

まとめ

イエス様が死より復活し、世の終りまでいつも共にいてくださると信じ続ける時、皆さんの心は守られ力が与えられます。また、喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共におられるイエス様を信じて、イエス様を家族や友だちに伝えて行きましょう。

♪主がわたしの手を♪(子どもさんびか89)



聖書 エペソ6・1～4 テーマ 両親に従う

序論

(大頭)

母の日を迎え、両親に対する態度について学ぶ。聖書は両親に従うこと、両親を敬うことを教えているがそれは何故だろうか。また、どのように従っていけばよいのだろうか。

一、人間関係の基本だから

パウロはモーセの十戒の第五戒とそれにもなう約束を記す。おそらく十戒のものと文脈が想定しているのは成人したクリスチャンの年輩いた両親に対する振る舞いである。年輩いた人々を敬い配慮する世代は、幸いと長寿の可能性を伸ばす社会的な環境を創造し、維持する。逆に高齢の世代に冷淡で、無視する態度が社会の通例になるなら、長寿と幸いな生活の可能性はすべての者にとって小さくなる。(ミラー「申命記」¹³⁵頁)

その一方で教会は伝統的に、第五戒は両親だけでなくすべての権威ある者に対する正しい態度を教えるものと理解してきた。さらにルターは大教理問答の中で「両親の権威から、その他のすべての権威が由来し、展開する」と述べている(同¹³⁶頁)。人が最初に出会う権威は両親である。両親を敬うことを通して、神から与えられた権威が基本的に良いものであって、それを尊ぶことが自他をいかに益することであるかを学ぶ。さらに、両親、特に父親との関係が子どもたちの神観を大きく左右していくこともよく知られている。神の権威を

敬うこともまた、両親を敬うことと強く結びついているのである。

二、祝福の約束があるから

エペソ書はおそらくパウロがローマでの入獄中に書かれた。そんな時代のクリスチャンがいかなる意味で「そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう」と言えるのかと、ブルースはいぶかしむ。おそらくパウロの強調は長寿ではなく、神の目に「正しい」生活を地上で生きる幸福にある(NICHT, Ephesia ns, F.E. Bruce)。

コロサイ書ではこのことを「子たる者よ、何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである」(3・20)と記す。主に喜ばれることがそが地上における真の幸福なのである。ここにおいてパウロは第五戒を用いながらも、それを彼の時代の状況に当てはめているのである。

三、主にあって

両親を敬うことを教えるのは聖書だけではない。あらゆる社会・宗教は同じことを命じているように見える。けれども「主にあって」の一語に目をとめたい。

キリスト者は主を愛するゆえに、両親に従い敬う。キリスト者とは主の愛を知ることによって新しい命へと招き入れられた人々である。新しい命は周囲との新しい関係をもたらす。親子関係においてもこの命は、相手への愛から発する真実な敬意と尊重を呼びさます。主イエスは「あなたがた

は、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言え、それでよいとして、その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている」(マルコ7・11～12)と言って、パリサイ人と律法学者たちを叱責されたことがあった。義務から生じるものは欺瞞であり、真実は愛から生じる。両親がキリスト者でない場合には、当然その言いつけに従い得ない場合がある。そのとき主にあたるキリスト者は、両親の滅びを恐れ、執り成し、悲しみつつ、けれども断固とした選択をする。その割り切ることでできない痛みは親子が主にあって一つとなるまでは消えることがない。

4節のキリスト者である父親に対する戒めにも、同様に「主の(薫陶)」と、主にある命が輝く。父であることの権威を濫用することなく、子どもたちの魂を育てるのである。その目的は、子どもたちもまた主に喜ばれる「正しい」生活を地上で生きることにある。

結論

主にある私たちは、両親がキリスト者であつてもそうでなくても、彼らを敬い従うようにと命じられている。また、両親への反発を感じている子どもたちに、第五戒はしばしば悔い改めのきつかけとなることを覚えてほしい。自我を確立するための葛藤と、その葛藤を隠れみのにしている子どもたちの罪とを、聖霊は見分けてくださる。単なる道徳訓に終わらない、救霊のメッセージが語られる事が望ましい。

研究資料

(宮澤)

「母の日」に当たり「両親に従う」をテーマに掲げている。この勧めは3節までの「子どもに対する勧め」と4節の「父親に対する勧め」に大別できる。しかし、この両者は表裏一体として取り扱うのが良い。

テキスト

子どもに対する勧めはこの箇所とコロサイ3:20に登場する。語る時は、この箇所も参照されたい。

1 子 「子どもたちよ」(新改訳)「子供たち」(新共同訳)とあるように、本来に子どもである状態(ヱテクナ)を指す。従うべき両親が健在であり、^{とほ}本当の親子関係の中に身を置く子どもの姿である。年端もいかぬ子どもたちの姿である。

主にあつて 「主に結ばれている者として」(新共同訳)。「主にあつて」を「両親」と結びつけ、主にある両親には従え、しかし異教徒の両親には従うな、という解釈がある。あるいは「従う」範囲を限定し、父が異教徒か異端者であるなら、もはや従う義務はない、とする立場も歴史上の解釈の中では存在した。しかし、それは例えば1ペテロ3:1〜2の解釈に反することになる。むしろ「主にある」を「子どもたち」にかけて、「主にある」子どもたちは両親に従いなさい、という読み方を取りたい。あるいは「主に結ばれている」「主にながっている」子どもたちは両親に従いなさい、と。神を認めることをしない世の風潮が「親に逆らう」ことであるのと対極の生き方を示したい。**正しいこと** 法的にも倫理的にも隣人の要求および神の要求に即し、かつそれに従って行為すると

いう意味をもつ。とりわけ神によって要求されていることを言い表す。

2 「あなたの父と母とを敬え」。これが**第一の戒めであつて**パウロは次に十戒の第五戒を持ち出して、1節の命令の正当性を主張する。神の律法であるからこの勧めを守らなければならないと言うのである。ここで、**第一の戒めであつて**、ということが何を指すのかを考えてみたい。①重要度において第一の、という意味、②十戒中第二部の「対人関係」の戒めの中の第一、という意味、③「約束の伴った戒め」の最初のもの、という意味(新共同訳、バルバロ訳、フランススコ会訳等)、④子どもたちが学ぶべき最も大切な、という意味(柳生訳)、など、様々な理解がされている。いずれにしても、パウロがこの戒めを大切な戒めとして捉えていたことは確かであろうである。

3 「そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであらう」。出エジプト20:12、申命記5:16からの引用。しかし、ここで目をひくのが、旧約原文では「あなたの神、主が賜わる地」と述べられている箇所が、ここでは「地上で」と言い換えられていることである。これは、モーセ時代の言葉を新約時代に当てはめ直したものであると考えることができる。

4 3節までの「子どもたち」に対する勧めから、今度は「父たち」に対する勧めへと転換する。

父たち 口語訳では「父たる」と訳されているが、原語では複数形になっている(新改訳、新共同訳)。また、父たちに対する勧めであるから母親は関係ないということではない。同じ原語の言葉をマルコ5:40やヘブル11:23では「父母」「両親」と訳

されているように、この勧めは両親に対する勧めであると理解すべきである。しかし、その勧めの中心はやはり「父」に対してであらう。

子供をおこらせないで 「おこらせる」とは、この箇所とロマ10:19にのみ用いられている言葉で、特にロマ書では「ねたみを起こさせる」と平行して用いられている言葉である。コロサイ書における前述のみ言葉では、「いらだたせてはいけません」(新改訳欄外注)とある。このことから、「おこさせる」とは、子どもを感情的に刺激し、興奮やねたみ、怒り、いらだちの感情へと走らせることに對する戒めが語られているのであらう。

主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい。

薫陶 とは、「教育」(新改訳)「しつけ」(新共同訳)とあるように、子どもを教え育てること一般をさす。また **訓戒** とは、(ヱヌース) 知性、精神という言葉と、(ヱティセーミ) 置く、据えるという言葉の合成語である。この両者の相違は①広義の児童教育と、狭義の訓戒、叱責「教えと戒め」(柳生訳) ②実践的な訓練や懲らしめと、言葉による知的な教え「懲と諭」(永井訳) ③実際の訓練と、言葉による知的、否定的戒め「規律をもつて育て戒めよ」(バルバロ訳)と種々あるが、子どもの行動に対するチェックという意味合いは含まれていそうである。ただ、いずれにしても **主の** という言葉があることを忘れてはならない。**主の** とは、「主についての」と取る者もあるが、むしろ「主が(新共同訳)」と、あくまでも「主が教え諭されるように」と取る方がいように思う。**参考図書** 榊原康夫「エペソ人への手紙下」(いのちのことば社)、他

26

聖書 使徒1・15 14 テーマ 聖霊待望の祈り

序論

(大頭)

イエスが復活されて40日目、イエス様は天に帰って行かれた。その時弟子たちに与えられたご命令は、聖霊を待ち望んで祈るようにということであった。旧約聖書において聖霊に満たされることは特別な機会に、特別な人々に与えられた。しかし、新約において聖霊に満たされることは、すべてのキリスト者に約束されている恵みである。ただし、それは自動的に与えられる恵みではない。すべてのキリスト者が聖霊を持っているとしても、それと聖霊に満たされることは異なることだからである。聖霊の満たしは伝統的にキリスト者にとつて聖めの体験としてとらえられてきた。小島伊助師は「聖霊の満たしはキリスト者の生涯に何度も繰り返される経験であるが、その最初のを聖霊のバプテスマと呼ぶ」と述べておられる。キリスト者の信仰体験は実に多様であつて、どれが標準的な在り方を定めることはできない。けれども約束されている聖霊の満たしは今も期待することができるとし、期待すべきである。今私たちは、聖霊に満たされることをどのように祈っていくことができるだろうか。

一、約束のみ言葉に信頼して

ルカはその福音書を聖霊の満たしの約束で終える。続く使徒行伝はその約束の成就から始まる。その約束はヨハネの福音書14章によれば、すでに

十字架前夜に与えられたものであつた。父が「別に助け主」(16節・新改訳では「もうひとりの助け主」)を送つてくださり、「その方」(17節・新改訳・口語訳の「それ」は聖霊の人格性が不十分)は「真理の御霊」であつて、「あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させる」(26)。

だから聖霊を単なる宣教のための力と考えてはならない。「わたしはあなたがたを捨てて孤児とほしない。あなたがたのところに歸つて来る」(同18)とあるように、この聖霊が来てくださることは、主イエスが歸つて来てくださることである。実に三位一体はありがたい。聖霊において主イエスは私たちと共にいてくださり(新改訳では「住み」)、また私たちのうちにいてくださるのである(同17)。聖霊に満たされることは、主イエスに満たされることである。弟子たちは主のみ顔を脳裏に浮かべつつ、その約束に信頼したのである。

二、悔い改めつつ、心を合わせ熱心に

〈心を合わせ〉とある。心を合わせて熱心に祈ろうとするときに、それをさまたげる互いの間の反目や不協和音が取り扱われずにはおられない。主イエスの面前でだれが一番えらいのかという争いを繰り返してきた弟子たちである。彼らの悔い改めは深刻を極めたのにちがいない。上からの満たしのために隣りにいる人との和解を欠くことができない。神の側にはいつも恵みを注ぐ用意がある。それを受けることが出来ないのは人間の側のかたくなさのためであることを知りたい。それは新生

においても聖霊の満たしにおいても同じである。

三、待ち望みつつ

弟子たちはまんざんと聖霊を待ったのではなかつた。過ぎ越しから50日目のペンテコステに至るまで、毎日待ち望み続けたのである。得るまで求め、望みをもって求めたのである。ウエスレーは「キリスト者の完全」を得るために「特に祈りが欠けている。だれがこのことを努めつづけているか。だれがこの目的のために神とすもうしつづけるか。『汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。求めてなお受けざるはみだりに求むるが故なり』とあるのは本当である。あるいは、あなたは死ぬ前に新たにしまえと祈っているかも知れぬ。死ぬ前に！それであなたは満足するのか。否、この恵みが今、今日、今日となえられるうちになされるように求めよ」(「キリスト者の完全」と記す。

結論

子どもたちに聖霊の満たしを語ることができるかどうかは、教師がそれを体験したかにかかると。今週をひざで神ににじりよる時としよう。

もう一箇所ウエスレーから。これは「どういう態度で聖潔を説くべきか」という問いへの答である。「追い求めていない人々には、ほとんど説かない方がよいであろう。求めている人々には常に約束として示し、そこへ追いやるよりも引き寄せる態度で説くのがよい」(前掲書)。子どもたちの中にある暗黙の求めを聞き取ろう。そして人間の体験の多様さを踏まえつつ語ろう。神の御心は私たちがみな聖霊に満たされることなのだから。

研究資料

(宮澤)

テキスト

152 第一巻 であるルカによる福音書の内容は、イエスの「行い」と「教え」とにまとめることができる。イエスの「行い」(奇跡)は、彼の「教え」と切り離して考えることはできない。その福音書の終わりには、「祝福しておられるうちに、彼らを離れて、「天にあげられた。」(ルカ24・51)と、**天に上げられた日までのこと**で閉じられている。また、この箇所においては**イエスが行い、また教えはじめてから**とあるのに注目したい。イエスの御業は十字架・復活・昇天において完結したのではなく、なおその働きは継続しているのである。使徒行伝は、このようにイエスの行いと教えの始まりから継続されている事柄についての継続と完成とに焦点を当てて書かれたものである。**テオピロ** 残念ながらこの人物像については確かなことは知られていない。実在している人物であるとすれば、ローマ政府の高官であったのではないかと推測がなされてもいるし、一方で「セオス(神)と「フィレオー(愛する)」という二つの言葉の合成語であることから考えて、この人物はある特定の人物ではなく、神を愛するキリスト者全体を指すとする見方もある。

イエスはよみがえり、40日にわたって弟子たちに顕現された。その中心は**神の国**であり、ルカにとって神の国はイエスご自身と同義である。**エルサレムから離れないで**という主の命令は、ルカ24・47、49に由来し、聖霊の降臨と宣教の開始とはエルサレムから始まるというのである。同時にキリストと教会とを結びつける場所がエルサレムなのである。**父の約束**とは聖霊のことであり、5節の言葉は直接的にはヨハネによる言葉(マタイ3・11、ルカ3・16)に由来する。イエスは、この言葉の成就の時がいよいよ近づいたと語るのである。その約束を待ち望む祈りをイエスは命じられた。**657** ルカは **さて**と書き出し、この物語が新しい場面へと転換したことを記す。弟子たちは6節の質問で、イエスがいつイスラエルの国を復興(建て直す)回復なさるのかと尋ねる。しかしイエスは、その弟子たちの質問には直接答えることをしないで、神がその目的を完成なさる時は父おひとりの権威の中にあるとされた。

8 これまでの弟子たちの野望であった、政治的な力による回復ではなく、主は、聖霊の降臨による宣教こそがご自身の宣教計画であることを示されたのである。**力**(デユナミス)は、ダイナマイトの語源となった言葉であり、ダイナマイトのような大きな力がそこには示唆されている。また**証人**(マリトユス)は、使徒行伝ではイエスの十字架と復活に関して用いられている言葉である。**9511** この箇所には、神学的に難解な「昇天」と「再臨」という二つのテーマが述べられている。しかし、本日のメッセージの主題が「祈り」(14)であること、そして紙面的にも論じるのは困難でもあるので詳細は省く。しかし、キリストの昇天はまぎれもない事実であり、弟子たちがキリスト昇天の目撃者であるという事実はこの箇所から語られるべきである。

12514 4節において示された主の御心により、主の弟子たちが第一にすべきことは、エルサレムに帰って神の約束を待ち望む祈りであった。**オリブ山**とは、エルサレムの東にあり、**安息日に許されている距離**にあった。この距離は、2千キュビトであり(出エジプト16・29)、ほぼ900メートルである。**泊まっていた屋上の間**については、主が十字架にかかれる前の晩の最後の晩餐の部屋であったとか、あるいはマルコの母マリヤの家にあったとかいわれている。また、13節には使徒たちの名前のリストが記されている。このリストは共観福音書にも記されていて、多少順番は異なるが、いずれもペテロが最初に挙げられていることは、使徒たちの指導者がペテロであることを物語っている。**心を合わせて**とは、初代教会の信徒相互の姿に関してしばしば用いられている言葉であるが、信徒が心を合わせて祈り、賛美し、語り合う姿は美しいものである。**ひたすら**という語も、内輪で共通の目標に方向付けられた群れが、ひたすら専心する持続ないしは固執を強調する言葉として、使徒行伝ではしばしば用いられている。これらの言葉は、これ以前の弟子たちの行為には用いられてはいない。弟子たちのこの姿勢は、キリスト昇天前後の弟子たちの姿の変化をよく表している。

参考図書 榊原康夫「使徒の働き」上巻(いのちのことば社)、F・F・ブルース「使徒行伝」(聖書図書刊行会) 他。

聖書 タイトル 暗唱聖句

使徒1・13-14
聖霊を求めよう！
心を合わせて、ひたすら祈をしていた。
使徒1・14
聖霊の満たしを求めて祈る者となる。

導入

(飯田)

皆さんは、今楽しみに待っていることがありますか。誕生日がもうすぐ来るお友だちは、「誕生日に、お父さんやお母さんが何をプレゼントしてくれるかなあ」と楽しみにしているかも知れませんね。もし、今年の夏休みに家族で旅行を計画している人がいるなら、それを今から楽しみに待っているかも知れません。待つことは、つらい事のようには思いますが、でも楽しい事であつたら喜んで待つのではないのでしょうか。今日、皆さんに期待し、祈りながら待っていて欲しい方がおられます。それは聖霊です。

イエス様が約束された聖霊

聖霊について聞いたことがあるかな？この聖霊は、イエス様が私たちに与えてくださると約束してくださったものです。イエス様は私たちの罪のために十字架にかかり3日目によみがえられました。そして、40日の間、多くの人たちに現れ、神の国についてお話をされました。そんな中、イエス様は弟子と共に食事をする時を持たれたのです。

イエス様と一緒に食事が出来るなんてうれしいですね。弟子たちには、イエス様が共におられ、イエス様からいろいろなお話が聞けることが一番

のご馳走であつたでしょう。弟子たちは身を乗り出すようにイエス様のお話に耳を傾けたに違いありません。

その時、イエス様は弟子たちに「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」と言われたのです。イエス様は、以前この聖霊について弟子たちにこう話しておられました。それは「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう」(ヨハネ14:26、27)と。そして、イエス様はその後、さらに「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と言われたのです。イエス様が何度もこの聖霊について言われるということは、この聖霊がとても大切なものであり、弟子たちにこの聖霊を受けて欲しいと願っておられることがよく分かります。これは、皆さんにも弟子たちと同じようにイエス様は約束されるのです。

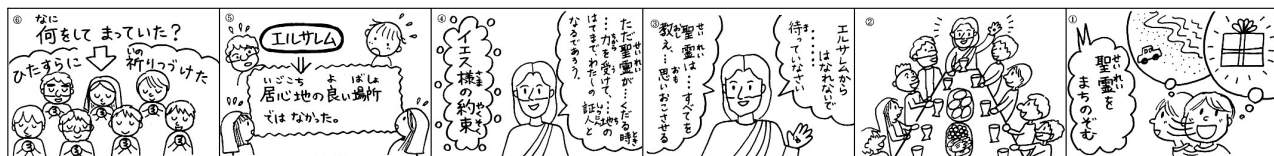
祈りながら聖霊を求めよう

イエス様は、弟子たちにどこで聖霊を受けるように待っていないかと言われましたか？エルサレムです。でも、弟子たちにとつてエルサレムは、居心地の良い場所ではなかったはず。なぜなら、エルサレムにはイエス様を十字架にかけた人たちが、またイエス様を信じる者たちを攻撃する人がたくさんいたからです。皆さんが、弟子たちだったらどうしますか？居心地の悪い所に留まりますか？それともすぐに、エルサレムから離れて安全な場所に行きますか？

弟子たちは、イエス様の約束された聖霊を受けるためにエルサレムに留まったのです。では、弟子たちはどのようにして約束の聖霊を待ったのでしょうか。皆さんも少し考えてみてください。答えは、祈りながら待ったのでした。しかも、それは一回祈って、終わりではありませんでした。彼らは約束の聖霊が与えられるまで、ひたすらに祈り続けたのです。それも一人で祈ったのではなく、120人もの人たちと心を合わせて祈ったのです。祈り続けた人たちは、イエス様の約束された聖霊を楽しみにして待ったのです。なぜなら、約束の聖霊が降ると力が与えられ、イエス様のことを多くの人たちに伝えることが出来るようになる。とイエス様が約束されたからです。

まとめ

皆さんは、イエス様の事を、恐れず一人でも多くの人たちに伝える者にされたいですか？聖霊はその事をしてくださる方です。約束の聖霊の満たしを楽しみにして熱心に祈り求めましょう。
♪主がわたしの手を♪(子どもさんびか89)



聖書 使徒2・1～17 テーマ 聖霊に満たされて

序論

(大頭)

ペンテコステは、聖霊が弟子たちの上に降った日である。聖霊に満たされることは、私たちにどのような変化をもたらすのだろうか。

一、聖別

聖霊に満たされた後の弟子たちの生活についてルカは記す。①いっさいの物を共有。資産や持ち物売って、必要に応じて分け合った(44～45)②心一つにして、礼拝と聖餐と賛美の日々を過ごし、すべての人に好意を持たれていた(46～47)。これはかつて主イエスが教えられた二つのいしましの成就であった。それは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ22・37～39)。すなわち神と人へのまっただき愛であり、これこそウエスレーが聖めの定義として好んで用いたものである。

まっただき愛を現実生き抜かれたのは主イエスご自身であった。だからまっただき愛とは主イエスのように生きることである。けれども主イエスの生涯の果てには十字架の死があった。主のように生きることは主のように死ぬことである。「進んで死なれた神にならう」ことがまっただき愛であり、そのためには自分の命を神のために明け渡ししかない、現代のウエスレーンであるキンローは述

べている(「キリストのように生きる」)。

私たちにとって、このことは厳しすぎるように思われる。だが主の命令は私たちを束縛するためではなく、解放するためであることを忘れてはならない。神を知らず暗やみの中に生きていた私たちの罪ゆえに主は十字架にかかってくださった。それは、私たちが自己中心の生き方から抜け出すためであって、主は罪と妥協をなさらない。御霊に満たされるときに、私たちはキリストの思いと心に生きることができ。そして、暗やみを憎み、神と人へまっただき愛を注ぎだすのだ。

二、宣教

「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」(47)は聖霊に満たされることのもう一つの結果を示す。このみ言葉が前述の44～47節に続いているのは偶然ではない。宣教は聖さの実である。「聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて……わたしの証人となるであろう」とあるが、この力は人々をなぎ倒すような霊力といったものではないことに注意を要す。キリスト者の自分を投げ出す生き方を見て、このような人々はいったい何者だろうか、この世はいぶかしむのである。

宣教の動機もまた御霊によつて与えられる。聖霊に満たされるときに救われぬ者は滅びるといふ真理が鮮やかになる。そのとき宣教は片手間でできなくなり、私たちをとらえて離さない関心事となる。御霊は神の思いを教える。神が減んで

しまう魂に痛む、その痛みを知るときに、私たちは祈り宣べ伝えずにはおられなくなる。

宣教の能力もまた御霊によつて与えられる。14節からのペテロの説教は旧約聖書を自在に用い、キリストの十字架と復活の福音を余すところなく語るものであった。その結果「その日、仲間に加わったものが三千人ほど」(41)という大リバイバルが起こった。御霊は私たちにみ言葉を理解させ、語らせ、聞く者を揺り動かす。

ペテロたちが用いた「他国の言葉」は御霊の働きの本質を物語る。かつてバベルの塔を建てようとしたときに諸言語の間に壁ができた。御霊は今、その壁を越えてみ言葉を宣べ伝えさせた。人々はただ奇跡を見て信じたというのではない。そのとき人々は「心を刺され」て、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と救いを求めたのであった。

結論

すべてのキリスト者は聖霊に満たされて生きるようにと招かれている。それはキリスト者にとつて選択可能なオプションではない。もし、私たちが聖霊の満たしを求めないならば、私たちの信仰はゆるやかな麻痺を始めるだろう。礼拝は形式的に、宣教はおざなりに、この世への関心が神への愛にとつかわるようになる。それは私たちにとつて取りかえしのつかない損失である。そして、だれよりもそれを惜しまれるのは神である。

研究資料

(宮澤)

本日の聖書の箇所は、2・1～17となっている。この箇所は、大別して五旬節の日の出来事（1～13）と、ペテロの説教（14～）に分けることができる。本日の聖書箇所の区切り方には違和感もあるが、17節の暗唱聖句を際立たせるための区切り方であると理解したい。と同時に21節の救いの事実と、この説教の聞き手である幼子たちに「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか（37）」という問いを呼び起こす説教でありたい。

テキスト

1 五旬節 この言葉は、大麦の収穫の初穂の束をささげてから50日目という意味である。すなわち過ぎ越し節の後の最初の日曜日から数えて50目に祝われる祭りであることからこの名がある。

2～4 これらの節に記述されている、聖霊の降臨の外的なしるしが事実であったかどうかと問うことは、恐らく無意味であろう。激しい風も、炎の舌も、一つのしるしとしてとらえる考え方が一般的である。しかし、だからといってこの箇所をそれだけで片づけてしまうことは、この節のもっている真の意味を薄めかねない。つまり聖霊の満たしとは、結果として外面的な、目に見えるしるしが伴う、ということである。聖霊に満たされるとは、主観的な自らの内的経験であると同時に、客観的な他の人からもそのように見える経験として現される。

5～8 聖霊降臨の出来事に対する群衆の驚きが記される。4節までの出来事を聞いて、集まってきたのは、七週の祭りを祝うためにエルサレムに

集まってきたいた **信仰深いユダヤ人たち** であった。信仰深いという言葉はユダヤ人に対してのみ用いられており（他にシメオンとアナニヤ、それにステパノを葬ったユダヤ人）、この奇跡は、彼らが証人となった事実を明確に記している。

また、**物音** については、**激しい風が吹いてきたような音**（2）か、もしくは **聖霊に満たされ、御霊が語らせるまに、いろいろの他国の言葉で語り出した**（4）声か、はつきりしない。しかし、文脈から考えて、他国の言葉で話し出した声が有力ではないかと考えられる。**驚き** とは、心を奪われるほどの大きな驚きであり、**怪しんで** とは、非常に広い意味範囲をもつ言葉であるが、いずれにしてもその奇跡に立ち会った人々の尋常ならざる驚きが記される。

9～11 この地名のリストについては、辞典などで調べて頂くことが望ましい。**パルテヤ人、メシヤ人、エラム人もあれば、メソポタミヤ** とは、ユダヤの東方の地方の名称であり、**カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ** とは、ユダヤから見て北西にある、いわゆる小アジア地方にある都市の地名である。またこれらの地方から見て南西側にある都市が **エジプトとクレネに近いリビヤ地方** であり、そこから遠く離れて西側にある地方が **ローマ** である。このローマだけが唯一ヨーロッパ本土の地名であることは興味深い。また、人種からいえば、**ユダヤ人と改宗者** とあるように、**天下のあらゆる国々から**（5）来いた人々であった。なお、**改宗者** とは、異邦人でありながらユダヤ教に改宗した人々のことである。

12～13 惑って とは、大いに困惑するという意味を持ち、ここでの民の困惑の度合いが大きいことを示す。一方、このような反応と同時に **あざ笑って** という反応があることも興味深い。

14～17 36節まで続くペテロの最初の説教。群衆の驚きと当惑とに対して、使徒たちを代表してペテロが立ち上がり、初代教会最初の説教をする。

15 朝の九時 ユダヤ人は朝、昼、晩の三度、祈りをしてきた。その朝の祈りの時刻が朝9時だったと思われる。また、ユダヤ人たちは、この朝の祈りの時が終わるまでは、食事を摂らなかつた。この15節は、13節のあざけりの言葉に対する反駁である。

16 ペテロは、「新しい酒で酔っている」と指摘された現象の真の意味を、ヨエル2・28～32を引用しながら説明する。

17 終りの時 ヨエル書では「その後」（ヨエル2・28）となっている。「時」は複数形で表現されており「日々」となる。「終わりの日々」すなわちキリストの再臨の「日」とは区別し、聖霊降臨によって始まる「教会の時代」と考える。

すべての人に注ごう ここではイエスを信じるすべてのユダヤ人を指し、預言者だけではなく、イエスを信じる老若男女すべての民に聖霊を注ぐという意味となる。

そして何より、ペンテコステの日の目的は「主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう」（21）というみ言葉の成就であり、ペテロの説教の結論の言葉である「悔い改めとバプテスマ」（38）であることを忘れてはならない。

参考図書 榊原康夫「使徒の働き」上巻（いのちのことば社）、F・F・ブルース「使徒行伝」（聖書図書刊行会）他

聖書 使徒2・1～17
タイトル 聖霊に満たされよう！
暗唱聖句 わたしの霊をすべての人に注いで。
目 標 聖霊に満たされて生きる。
 使徒2・17

導入 (飯田)

教会には、三つの大きな祝いごとがあります。皆さん、分かりますか？一つは、イエス様の誕生をお祝いするクリスマス。二つ目は、イエス様が死からよみがえられたイースター。そして、三つ目はイエス様の約束された聖霊が降ったペンテコステです。今日は、ペンテコステの礼拝です。これは私たちにとってとても大きな恵みなのです。

約束の聖霊に満たされた

先週、イエス様が天に上げられる前に弟子たちに約束されたものは何だったでしょう。そう、聖霊だよね。その聖霊を弟子たちはどこで、何をしながら待ったのでしょうか？それは、エルサレムで多くの人たちと心を合わせて熱心に祈りながら約束の聖霊が降るのを待ったのでした。皆さんは、弟子たちのように祈ることができましたか？

イエス様は、聖霊がいつ降るかについてお話になりませんでした。でも、弟子たちは聖霊が与えられるまで必死に祈りつづけたのです。すると、イエス様が天に上げられて10日後（ペンテコステの日）に不思議なことが起こったのです。皆が祈っているとき突然、「ゴォー！」と激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、その音が家中に

響いたのです。さらに、舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、一人一人の上にとどまったのです。すると皆は、聖霊に満たされたのです。イエス様の約束されたとおりになったのです。

聖霊によって変えられた

イエス様は、この聖霊が降るとどうなると弟子たちに言われていましたか？イエス様の言葉にもう一度耳を傾けてみましょう。「ただ、聖霊があなたに注がれたとき、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の端まで、わたしの証人となるであろう」。そう、力が与えられ、イエス様を多くの人たちに伝えていく人になると言われたのです。力を受けるとは、何か急に筋肉がムキムキになって力持ちになることではありません。イエス様のことを多くの人たちに伝えることができる力なのです。

イエス様の弟子たちは、聖霊に満たされるまではどうだったのでしょうか。彼らは、恐れや疑いで満ちていました。でも、この聖霊に満たされてからは180度、変えられたのです。弟子のペテロさんもその一人でした。ペテロさんは、イエス様を裏切った人でした。でも、そのような弱さをもった人にも聖霊は、注がれたのです。

聖霊は強い人や努力する人、頭の良い人だけに注がれるものではありません。イエス様を信じ、聖霊を祈り求める人には、だれにでも注いで下さるのです。聖霊に満たされたペテロさんは力が与えられて、人を恐れないでイエス様を伝える人に変えられました。他の弟子たちも、各地に遣わされて行きました。

例話

昔、イギリスにウィリアム・ケアリーという人がいました。彼は、小さな村の貧しい靴屋の子供でもした。そんな中でも彼は両親と共に教会に通っていました。16才の時、靴屋の見習いのために故郷を離れます。職場の友人に誘われて教会の集会に出ました。彼は、そこで聞いたメッセージに感動して、信仰の目が開かれたのです。彼の心の中にイエス様を伝えたいとの思いが与えられて仕事をしながら準備をしていました。そして25才の時に牧師となったのです。ある朝、世界地図を見ながら祈っている時、聖霊に導かれて「私はあなたのそばにいます。私を遣わして下さい」と祈りました。やがて彼は、イエス様を伝えるためにインドに遣わされました。生活習慣、食べ物や気候が全く違うインドでの生活は大変でした。でも、祈りと涙の伝道の中で、イエス様を信じ救われる人たちがたくさん起こされました。インドに来て数年経った時、奥さんと息子が天に召されて行きました。ケアリーにとっては大きな悲しみでした。しかし、聖霊に満たされていたケアリーは、あきらめることなく力強く、イエス様を伝えていったのでした。 (立石靖夫著『リバイバル人物伝』)

まとめ

聖霊には、ものすごい力と恵みがあります。皆さんは、この聖霊に満たされたいと思いますか？イエス様は、皆さんに聖霊を注ぎたいと願っておられます。聖霊に満たされて、たくさんの人にイエス様を伝える人にして頂きましょう。
 ♪もちいたまえわが主よ♪ (子どもさんびか113)



聖書 マルコ1・14～15 テーマ キリストの宣教

序論

(大頭)

主イエスは、年およそ30歳で公に宣教の働きを始めた。その時語られた福音とはどのようなものだったのだろうか。まず福音はよく知らせ、グッドニュースであることを十分に理解したい。ニュースとは事実の報道である。信じるかどうかは聞く人次第であるけれども、聞く人の反応に係なく事実は存在する。第二次世界大戦が終ったニュースを信じないで、30年間ジャングルの中で戦い続けた方がおられたことをご存じだろうか。何という悲劇だろう。

一、時は満ちた

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記3・15)という御子の派遣の約束以来、繰り返されてきた神の恵みの支配の預言はついに実現した。その時がついにきたのである。

時が満ちたのは、神がそのイニシアティブを取って満ちさせられたからである。神は損なわれた世界を回復するために主イエスを遣わされた。時が満ちたから主イエスが来られた、というよりもむしろ、主イエスが来られたから時が満ちたのである、と覺えたい。「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる」(1・7)と言ったパプテ

スマのヨハネは、自分が時が満ちる直前の人であることをよく知っていた。

〈時は満ちた〉の持つ圧倒的な勝利の響きに注意したい。次の〈神の国は近づいた〉に見られるように、神の国は始まったけれども完成していない。けれども、新約聖書において支配的なのは「始まった」の響きである。決定的に新しい時代が到来した。主イエスが来られた世界はもはや以前の世界と同じではない。だから救いは今、ここである。

二、神の国は近づいた

神の恵みの支配である神の国が始まる以前には、人々はサタンとその悪の力の支配の下にあった。罪と悪魔の圧制からの救いこそが神の国のもたらす現在の実である。しかし、この解放のために御子の十字架があつたことを忘れてはならない。「それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解放放つためである」(ヘブル2・14～15)とあるように。

始まったけれども完成していない神の国において、死はいまも存在する。しかし永遠の命は死を超える。誘惑は今も存在する。けれどもキリストと一つにあるならば、私たちは罪から守られる。病の床も悲しみに終わらず、賛美と証の祭壇となる。このように、私たちは完成へ向かう世界の中で苦しみつつ喜び、喜びつつ苦しむ。そうしている内にも神の国は成長している。そしてやがて主

が再臨なさるときに、損なわれた世界に完全な回復が訪れるのである。

三、悔い改めて福音を信ぜよ

ここに福音の宣言は単なる宣言にとどまらず、私たちへの招きとなる。すでに始まった神の国へ飛び込むようにと主はお命じになるのである。

神の主権は人間の自由な応答と共存する。救いは一方的な神の恵みでありながら、私たちの側の応答なしには成立しない。これがウエスレーの信じた神人協働説である。つまり、もしだれかが滅びるならその責任は神ではなく、招きに応答しなかった人間の側にある。

招きへの応答は悔い改めとイエス・キリストへの信仰である。〈悔い改め〉(改メタノイア)は心の向きを転換するという意味をもつことは。自分の罪に気がつき、赦しを乞うて、これまでの自分中心に生きてきた生き方を神中心に転換することである。悔い改めと信仰を切り離すことはできない。「罪を悔いて赦しを求めることをしなければ、神を信頼して生きることはいかならない」(内田和彦著『キリスト教は初めて』という人のための本 90頁)からである。

結論

今日の箇所直後、16～20節にはシモン・アンデレ・ヤコブ・ヨハネの4人の弟子への召命と彼らの即座の服従が描かれている。もちろん、これは彼らだけのことではない。福音を聞くすべての人は、このように主イエスを信じて従うことを期待されているのである。

研究資料

(宮澤)

先週までの「聖霊」という単元を終わり、今週より「キリストの教え」という単元に入る。「キリストは何を語られたか、何を教えられたか」と問われて、答えに窮する人は意外に多いのではないだろうか。内容豊かな福音書の中で「では、キリストは何を語られたか」と問われた時、ひとりで「こうです」と語ることができるようになりたいものである。この箇所は、その問いに答える箇所である。主イエスのお言葉の中心にあったもの、主イエスの働きの中心にあったことも皆この言葉に尽きると言ってもよい。

テキスト

14 ヨハネが捕えられた後 直訳は「ヨハネが引き渡されて後」。ヨハネの時代が終わり、イエスの時代へと至る連続性が語られる。**ガリラヤ** イエスの宣教の中心地。**神の福音** イエスが宣べ伝えたのは「神の福音」であった。それは「神についての福音」と理解することもできるが「神から与えられた福音」と理解する立場の方が多い。

福音 については後で述べる。

15 時は満ちた 神が定められた時が到来した、という意。すなわち旧約におけるご自身の約束が成就するために、神が定めておられた時が到来した、という意味である。**時** とは〔カ〕イロスという言葉である。この「時」とは、神の計画の中で定められている終末の救いの「時」であり、「正しい時」「適切な時」「好ましい時」「ある定まった時」「危機の時」「最後の時」といった意味を持つ。新

約聖書では、「満ちる」の他に「完了する」「成就する」「完成する」「実現する」といった意味に訳されている。イエスは「あなたがたは、(旧約)聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この(旧約)聖書は、わたしについてあかしをするものである」(ヨハネ5・39)と語られたように、旧約聖書はキリストの来臨を預言している書なのである。その旧約聖書がキリストの到来を通して実現成就したという宣言なのである。

神の国は近づいた **神の国** とは、人間が考えるような理想郷(ユートピア)や、空のかなたにあるといったものではなく、神の恵みの支配を指す。神が王として支配することであり、神の栄光、神の正義、神の平和、神の救いが満ちているところである。その神の恵みの支配が **近づいた** と語るのである。この **近づいた** を、到来した、という意味に解する説もある(実現された終末論)。「時は満ちた」のであるから、神の支配も実現したというのである。またこの **近づいた** を、将来のことと理解する説もある(徹底的終末論)。しかし、ある学者は、この言葉を「イエスの到来によって、神の恵みの支配が始まった。しかし、それはもう一度イエスが来臨なさる時に完成するのである」(開始された終末論)という考えを示した。聖書にはその両面が記されている。イエスの到来によって、確かに神の国は現実のものとなった。しかし同時に、この神の国はキリストの再臨によって完成するものであつて、聖書はこの両者を語っているのである。

悔い改めて福音を信ぜよ もう一つ、イエスが主

張されたことは悔い改めと信仰である。イエスのメッセージの中心は「神の国」であり、その神の国に入るために必要な条件が「悔い改めと信仰」ということである。**悔い改め** とは、原語的な意味としては「よい方へ(あるいは悪い方へ)心を変える」という意味である。新約聖書では、人間の生きる姿勢全体の転換を表し「明らかにされた神の姿に合わせた生き方を取る」という意味として用いられる。すなわち「悔い改める」とは、生き方の一部の手直しではなく、生き方全体の方向転換を意味する。また、悔い改めの対象は、罪の結果に対しての悔い改めではなく、罪そのものに対しての悔い改めを指す(マルコ1・4)。この点、後悔とは決定的に異なる。この悔い改めが神の民とされるための消極的側面であるのに対して、「福音を信じる信仰」という側面は神の国への積極的側面であると言えよう。**福音** とは、古典ギリシヤ語では、よい知らせをもってきた者に対する報酬という意味で用いられた。しかし、後にはよい知らせそのものを指して用いられている。イエスが宣べ伝えた神の国は「よい知らせ」(福音)であり、マルコはこの「よい知らせ」(福音)がイエス・キリストによつてもたらされたものであり、何よりもこの福音はイエス・キリストそのものであると語るのである。そして、そのイエス・キリストを私にとつての「よい知らせ」(福音)として信じる信仰が、神の国に生きる民には必要なのである。

参考図書 小林和夫「栄光の富Ⅱ」(日本ホーリネス教団出版局)、他

聖書 マルコ1・14～15

タイトル イエス様の宣教

暗唱聖句 悔い改めて福音を信ぜよ。

マルコ1・15

目標 悔い改めて福音を信じる者となる。

導入

(飯田)

イエス様は、復活された後、弟子たちに現れて「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」と言われました。弟子たちに宣教命令をされたイエス様の生涯は、まさに神様のことを多くの人たちに伝えて行った生涯でした。イエス様は、およそ30歳の時に宣教を開始されたのです。

時が満ちた

その最初の言葉は、「時が満ちた」でした。これはどういう意味でしょうか。皆さんの中で「時が満ちる」と言う言葉を使いますか？例えば「時が満ちたから学校に行こう」、「時が満ちたので卒業しました」と言いますか？あまり言わないですね。この言葉は、「神様の約束された時が来ました」という意味です。私たちはみな、罪人です。罪は、最初の人間アダムとエバが神様の約束を破った時から、私たち人間が内に持っているものです。ですから、「ぼくは罪を犯したことがあります。ぼくは罪人ではありません」とは言えないのです。悲しいけれど皆さんが「オギヤ」と生まれた時から

ら心の中に罪をかかえているのです。神様は、アダムとエバが罪を犯した時から、罪人である私たちを救おうと計画しておられました。しかし、イエス様が来られるまでは、その救いの実現の時がまだ来ていなかったのです。イエス様が来られることによって、救いの時がやって来たのです。イエス様もそのことをよくご存知でした。時が満ち、神様の救いの約束の時が来たことで、今、私たちはイエス様による救いを頂くことが出来るのです。

神の国は近づいた

続けてイエス様は「神の国が近づいた」と言われました。皆さんは神の国ってどのようなところだと思いますか？綺麗な景色や美味しい食べ物、楽しいゲームがいっぱいあって、いつまでいても飽きないところでしょうか。この神の国とは、神様の恵みが満ちているところなのです。イエス様は、神様の恵みに満たされた人でしたので神の国はイエス様の中にあります。ですから、イエス様を心に受け入れる人の中に神の国は始められるのです。何と素晴らしいことでしょうか。イエス様は、罪に苦しんでいる多くの人々を神の国に招くために宣教されたのです。神の国は近づきました。皆さんは、神の国に入っていますか？

悔い改めて福音を信ぜよ

神様の恵みがあふれている神の国は、イエス様によって始まりました。イエス様は皆さんのことも、恵みで満ちた神の国に招いておられるのです。では、どのようにしたら神の国に入ることが出来るのでしょうか。それは、イエス様が言われたように、「悔い改めて福音を信じる」ことです。神の国に入っていない心は、罪でいっぱいなのです。私

ちは心にあるものが口から出て来ます。また、心の中にあるものが行動となります。もし、皆さんの心の中に、友だちに対して「あの人なんていなかったらいいのに」という思いがあるなら、口からはその友だちに対する悪口が出て来たり、友だちをいじめたり、無視したりという行動が出て来たりします。罪があると友だちを傷つけるだけでなく、自分も傷つき苦しんでしまいます。ですから、自分の罪を正直に神様の前に悔い改める必要があるのです。悔い改めるとは「方向転換」することです。今まで神様に背を向け、罪の道を歩んで来たことをお詫びして、180度方向転換するので。そして、私たちの罪のために十字架で命を投げ出し、3日目に死の力を打ち破ってよみがえられたイエス様を心の中で信じ受け入れるのです。皆さんの心の中には罪がありませんか？「心の中はだれも見ることが出来ないで安心だ」と思っていますか？でも神様だけは、皆さんの心を見ておられるのです。悔い改めない心は、恵みが満ちあふれているのではなく、罪でドロドロになっています。しかし、罪から自由にしてください。イエス様を信じ受け入れるならば、イエス様が私たちの心に住んでくださるのです。その時、イエス様にあつて神の国は私たちの心の中に始まってくるのです。イエス様は一人でも多くの人たちが救われて神の国に入れるように宣教をされたのです。

まとめ

皆さんの心はイエス様の恵みで満ちあふれていますか？罪を悔い改めてイエス様を信じましょう。イエス様は、皆さんを神の国に招いておられます。♪主に従いゆくは♪(子どもさんびか87)



聖書 マタイ5・1～12

テーマ 真に幸いな人

序論

(福井)

マタイによる福音書5章から7章は、主が語られた山上の説教(垂訓・教え)と呼ばれている箇所である。特に5章1節から12節は、山上の説教の前文とも言えるべき、八つの祝福の教えである。

一、幸いとは

3節から10節まで、原語ではいずれも「幸いである」という言葉で始まっている。次に、「……者は」という幸いの条件が示され、最後に「……からである」という幸いの理由が示されている。

ここで主が教えられた〈さいわい〉とは、この世の中で言う「幸い」とは違う。国語辞典では、「幸い」の同義語は「幸福」である。その場合、幸福は物質的なものと結びつける傾向が強いのではないかと思う。物に恵まれ満ち足りていれば幸福を感じ、また家庭も職場も何もかも好都合にうまく行っていると思ふ。この世の中においては、自分の立場から、何でも好都合にいくことが幸福なのである。

しかし、主が教えられた〈さいわい〉は、この世的なもの、物質的なもので自分が満足して楽しいという意味ではない。〈さいわい〉のギリシア語の「マカリオス」には聖なる喜び、永遠的な喜びの意味がある。しかし、主の言われた〈さいわい〉は、文脈から別の意味になり、それは「祝福」である。それゆえ、「祝福される」とは、深い霊的な意味であり、神の天的な深い、豊かな恵みにあず

かることである。神から与えられるこの恵みは、どのような逆境の中でも、どんな状態でも、これを取り去ることはできない。

二、八つの祝福

このような祝福を受ける人々とは、以下のよう

に教えられている。

①こころの貧しい人(3節) 心の貧しい人とは、霊において貧しい者のことで、心が謙遜な者である。その人は、謙遜と敬虔さをもつて、主に依り頼み、天国が、その人のものとなる。それは、神の統治、キリストご自身が心を支配されるようになり、神の恵みがその心を支配するからである。

②悲しんでいる人(4節) 罪を犯し、罪に負けた時に罪責感から来る悲しみ。また、信仰の薄さ、霊的に成長しない自分、イエスへの愛の希薄、隣人への愛の冷やかさに対する悲しみである。その悲しみは、救いに至る悔い改めを生じさせ、赦しと交わりから来る慰めが与えられるのである。

③柔和な人(5節) 神に対する謙遜である。その人は、神の摂理に対して恨まず、自分の願ひどおりにならなくても不平を言わず、御心に対して忍耐深く、従順である。他人に対してなごやかで優しく、過ちを赦し、祈る。その人は新しい天と地を受け、主とともに治めるのである。

④義に飢えかわいている人(6節) 真に生まれ変わった人は、義に飢え渴いている。義とは神の義であり、正しいことであり、きよめられることである。それは「キリストご自身」に飢え渴くことである。その人は、満ち足りるようになる(詩篇17・15)。

⑤あわれみ深い人(7節) 〈あわれみ〉とは「同情する」、「可哀相に思う」、「気の毒に思う」ことである。しかし、主がここで言われることは、ただ言葉に留まらず、それを自分の不幸、悲しみと見なし行動することである。それは主に對してしたものともみなされ、あわれみを受けるのである。

⑥心の清い人(8節) 私たちが行動したり、話したりするとき、その背後に隠されている心の状態、すなわち動機が、汚れていないで純潔であるとき、その心はきよいという。人の目に見えない心の状態をきよく保つ人が、〈心の清い人〉である。その人は〈神を見る〉のである。

⑦平和をつくり出す人(9節) 平和をつくり出すには、自分がキリストの平和によつてつくり変えられた者であることが第一である(ローマ5・1)。兄弟の間に平和(マタイ5・24)を、さらに、すべての人との間に平和をつくり出すとき(ローマ12・18)、その人は〈神の子〉とされる。

⑧義のために迫害されてきた人(10節) 〈義のため〉つまり、キリストに対する信仰を守り、「正しくあり、また正しいことを行つたゆえに」、迫害を受ける(Ⅱテモテ3・12)。これは旧約の預言者の後継者、キリストの弟子の証拠である。その人はこの世で天国(神の支配)を経験し、やがて天にて報いを受ける(12)。

結論

これらの言葉は「幸いの宣言」「幸いの条件」「幸いの理由」がユダヤ的な詩の形式になっている。その「幸い」の理由を一語で表すなら、「天の御国」が私たちに与えられることである。

研究資料

(井上)

イエスが語った説教の中で最も有名なものといえる山上の説教を4回にわたってテキストとする。倫理的、道徳的な教えであると受け止められるが、一方的な命令ではなく、単純な道徳訓でもない。ロシアの文豪トルストイはこの箇所を金言とし、自分の生活に厳密に適用したことでも有名である。しかし、彼はそれに耐え切れず、家出して死に至ったと言われている。

テキスト

1 山に登り、座につかれると 山とは、伝承ではカペナウムの南西2kmにある丘とされる。現在、山上の垂訓の教会が建てられている。旧約時代、モーセがシナイ山で十戒を受けた場面の厳しさとは対照的に、ガリラヤの穏やかな自然の中でイエスは語られた。**座につかれると** ユダヤのラビは座って教えることを常としていた。

3 こころの貧しい人たちは、さいわいである **さいわい**(マカリス)は3節から10節までの八つの祝福とすると、11節を含めて九つの祝福とする考えで分かれる。前者は11節の「さいわい」を、10節の迫害についての「さいわい」に含めて八つの祝福とする。後者はさいわいが記されている回数が9回であるので、単純に九つの祝福とする。原文では文語訳の冒頭が「幸福なるかな」で始まるように、「さいわい」が文頭にある。**こころの貧しい** 霊的な貧しさを持つ人、心砕かれた謙虚な人を指す。信仰者は、救いに与るために心低くされた。救われた者ならばこころ貧しい者である。**天国は彼らのものである** 読みどおり、「やが

て天国に迎えられる」ではない。すでに天国にあることを意味する。マタイは神の国を天国と表現する。救われた者は、今この時も神の国の一員とされているのである。

4 悲しんでいる人たち 単純にこの世の悲しみを指すものではない。3節が信仰者について記すように、信仰者の悲しみである。信仰者は神の光に照らされて、罪や汚れを深く知っている。イエスを十字架に付けさせた罪の深さを悲しむ者である。**慰められる** 信仰者は罪の重荷が取り除かれ、赦しの慰めを受けるものである。イエスと日々交わる慰めに生かされるものとなる。

5 柔和な人たち 柔和とは、ひ弱さではない。柔和は、神の意思への服従であるということ。イエスの姿からも教えられる。シユロの主日のイエスは、「柔和なおかたで、ろばに乗って」と、ゼカリヤ9・9の言葉が引用されている(21・5)。イエスは決然とした姿勢で、神の御心である十字架に進んで行かれた。柔和は神の意思を果たす積極性を持つている。**地を受けつく** 世の中では勝利が自己主張によって得られるとする。神の御心に従うことが榮譽につながることを示している。

6 義に飢えかわいている人たち 世の中に正しいことを求める人はそう多くはない。義なる神を信じる者にとって、義を求めることは自明のことである。神の義は救いとも受け取ることができる。救いに与り続ける歩みは、義を求め続ける歩みである。**飽き足る**(コルタゾー)という言葉は草という言葉から生まれている。家畜が青草を食べて満足する様子を表している。

7 あわれみ深い人たち 神からあわれみを受け

救いに与った信仰者は、あわれみに生きる者である。隣人を愛することを、良いサマリヤ人のたとえ(ルカ10・30〜37)でイエスは語られている。**8 心の清い人たち** 清い(カサロス)は、混じりけがない、水増ししていないという状態を指す。心が清いとは、神に対して単一である、二心を持つていないことである。**神を見る** 人は汚れた存在であるが、救いを通して神に立ち返る。さらに、十字架の血潮と、聖霊の炎によって、心きよくされることができる。きよさに与り、神に近づくことが、神を見ることである。

9 平和をつくり出す人たち 信仰者は神との和解を受け、神との平和が与えられている。神との平和があつて、人との平和に生きる、地上に平和をもたらすものとされる。**神の子と呼ばれる** 神のご性質を映し出す者とされる。

10 義のために迫害されてきた人たち 救いに与り義とは何かということが解つた者でなければ、神の義には立てない。神の義がないがしろにされていることに異を唱え、抵抗する信仰者の姿である。**天国は彼らのものである** 身に害を受けたとしても、神の義を求める者は、神の国のただ中にいるのである。

12 あなたがたより前の預言者たち イエスの受難は言うまでもなく、旧約聖書の時代の預言者たちも神の真実を語つたゆえに迫害を受けた。(ヘブル11・32〜38)。この世が悪に染まり、神の真実を受け入れようとしない証でもある。

参考図書 『The Gospel According to Matthew. Leon Morris.(Eerdmans)他

聖書
タイトル
暗唱聖句

マタイ5・1～12

あなたはしあわせ？

こころの貧しい人たちは、さい

わいである、天国は彼らのもの

である。

マタイ5・3

目標 真に幸いな人がどういう人かを
知る。

導入

(和田)

「イエス様、イエス様！助けてください！」
病氣の人々や悩んでいる人々が、次々とイエス様に助けられ、癒されていきました。そして、さらにたくさんの人々が続々とイエス様のところに来集して来たのです。そこで、みんなを愛しておられるイエス様は、神様の大切なメッセージが良く聞こえるように、山の上から、少し低い場所にいるたくさんの人々に向かって語られました。「山の上の教え」と言われるそのお話を、今日から4回に分けて学びます。1回目のお話のテーマは、「本当に幸せな人」ってどんな人なのか、です。幸せになりたい人は、絶対聞き逃しませんよ！さあ、心の耳を澄ませてね！」

本当に幸せな人って？

「ねえねえ、本当に幸せな人ってどんな人だと思う？」あなたの家族やお友だちにそう聞いてみたら、どんな答えが返ってくるかな？「お金持ち！」「けがや病氣のない人！」「なんにも困ったことがない人！」「自分の好きなことだけ自由にできる人！」などなど…。でも、知ってください。お金をたくさん持っていて、病氣や悩みがなくても、「あゝ

あ、わたしは幸せじゃない」って、重い心で生きている人、結構たくさんいるんですよ…。つまり、そういうことと、本当の幸せとは、関係あるようで、実は全然関係がないってことなんです。えいびつくり！でしょ？

では、本当に幸せな人ってどんな人なんでしょう？それは、神様しか与えることのできない、豊かな恵みをいただいている人、そして、神様の大きな深い愛によって満たされているので、たとえ周りから見ても辛そうでも、苦しそうでも、惨めでも、病氣でも、びくともしない本物の平安で魂が包まれている人なんです。つまり、神様につながっているかどうかで、人が幸せかどうかが決まるのですね！

心のまじしい人はさいわい？

ここで、もう一度今日の暗唱聖句を声を合わせて言ってみましょうね。覚えてたよね？そう、「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」「えっ？心が貧乏な人？」いえいえ、「私は神様の恵みなしには生きていけません。こんな小さな弱い私でさえ、神様が愛して助けて導いてくださるなんて…。神様、本当にありがとう！あなたが一緒にいてくださるからこそ、生きていけるのです。」そんなふうに、神様の前に、決して高ぶらず、心から神様を信頼している、心の貧しい人が、本当に幸せな人なのです。イエス様はそう教えてくださいました。

神様の御国にこそ幸せが…

「天国は彼らのものである」ってどういうことかな？実は、このときイエス様が「天国」とおっしゃったのは、やがて死んだらいく天国、という意味と

は少し違うのです。「神様の国」「神様の恵みによって治められている、満ち足りた、平和な、きよい心」のことなのです。神の国の王様はイエス様ですよ。心の貧しい人は、イエス様が王様として、愛をもって心を治めてくださるから、本当に幸せなんです。ねえ、あなたは幸せですか？もしそうなら、心から神様に感謝しよう！もしそうでないなら、神様にお祈りして、心の貧しい人にしていただきましょう…。

例話

熱心なクリスチャンのスパフォードさんは、船の事故で愛する四人の娘さんを一度に亡くしました。何という悲しい出来事でしょう。やがて、彼は船に乗って、娘たちが亡くなったその海の上に来た時、神さまを深く信頼している彼の心は平安に満たされ、そして次のような詩が心に浮かんできたのです。「静かな川の岸辺を、過ぎゆく時にも、悲しみや悩みの荒れ狂う海を渡る時にも、心は平安です。神さまが共におられるから、わたしのたまりたいは平安なのです。」（賛美歌520番）心の貧しい彼の内側に、神様は、イエス様が治めてくださる神の国をお与えになったのですね。

結び

イエス様は本当に幸せな人について他にも七つのお言葉で教えてくださいました。ただし、勘違いしないで！今日のみ言葉も含めて合計八つのそれらの教えは、「よし、頑張って幸せを勝ち取るぞー！」って、自分の力で届こうとする目標なんかじゃありませんよ。イエス様を信じるなら、神様の力によって自然にそのように変えられていく、という恵みの約束なのです。うれしいね！

♪こころにいつも♪（教会学校さんびか・36）



聖書 マタイ6・25～34 テーマ 思いわずらうな

序論

(福井)

この箇所は、聖書の中で最もよく知られているものの一つである。イエスは食物(空の鳥)と衣服(野の花)という人間の生活必需品を通して、「御国の子ら」に、神を信頼して「思いわずらうな」と戒めておられる。

一、神への信頼

イエスはまず「空の鳥を見るがよい」と言われた。彼らは、生活のために働くことを少しもせず、自分たちの食べ物を蓄えたりもしない。その彼らを神は養ってくださる。彼らは天の父である神が必要を満たすために与えられるものを集めるだけである。人を鳥よりも、「はるかにすぐれた者」として創造された神は、私たちを養ってくださるのであるから、ただ信頼することである。

次にイエスは「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」と言われた。野に咲く花は「働きもせず、紡ぎもしない」のである。それでも神は「ソロモン」の「栄華」よりも、すなわち人工美よりも美しく飾られた。神は人よりも劣るものをこのように摂理の御手をもって装われるなら、人間にもっと深い配慮をなさるはずである。だから、ただ神を信じることである。

人は働き、紡ぐべきである。しかし、これら一切のことをなし終えたら、あとは神の摂理にすべてを託すべきである。「信仰の薄い者」は空の鳥と

野の花の教訓を認めず、「思いわずらう」が、御国の民は信仰に立つようと、深い意味をもって語られた。

二、思いわずらうな

25節から34節には「思いわずらう」(新改訳では「心配」が6回出ている。それに対してイエスは「思いわずらう」ことの不必要であることを語っておられる。

①「空の鳥(野の花)を通して、神は造られたものを養ってくださることを示しておられる(26、28)。

②「私たちがいくら「思いわずらった」としても、自分の寿命をわずかでも延ばす」ことはできない(27)。人間の寿命は神が定められることであるから、いくら思いわずらっても、寿命は少しも延びない。それと同じように、いくら「思いわずらった」も問題の解決にはならない。

③「父なる神は食物や衣服(人間の生活必需品)が私たちに必要なことをすべて知っておられる(32)。そのため愛をもって配慮し備えてくださる。神は決して物質的な必要を軽視したり、無視したりはなさらない。だから心配するよりもまず神を信じることである(8)。

④「あすのことを思いわずらってはならない(34)。人生にはその日その日の苦労があるのだから、一日一日の責任を果たして生きることである。(「あす(未来)」のことは、神がご支配しておられるのであるから思いわずらう必要がないのである)。

三、まず神の国と神の義とを

そこでイエスは「まず神の国と神の義とを求めなさい」と命じられた。「神の国」とは神のご支配のことであり、「神の義」とは神の正しさのことである。要約すると、私たちの生活と周囲にあるすべての事において神の御支配を求め、神の御心と栄光の現れることを求める生活することである。言い換えると、自分中心の生き方ではなくて、神を「主」にして、自分は「従」の生き方することである。それは、神に信頼し、服従して生活することである。

「そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」とイエスは約束された。「これらのものは食物や衣服だけではない。私たちが人間として生きて行くときにはそうした物質的必要のほかに、非物質的なたくさん必要物がある。例えば、健康、知恵、才能、もちろん信仰もしかりである。それらはみな、人間が神によって生かされているものであるとの自覚に立って、神に信頼し、服従して歩むなら備えられるものだ、とイエスは言われたのである。そのような生き方こそは「思いわずらい」から解放し、平安を与え、神の目標に向かって働くものとするのである。

結論

最も大事なことは、「神の国と神の義」を求めていく、すなわち、神に信頼し、服従して生活することである。そうすれば、食物や衣服という物質的なものだけでなく、霊的なものにおいても、空の鳥を養い、野の花を装われる天の父は豊かに与えてくださるのである。

研究資料

(井上)

山上の説教から、空の鳥、野の花を見なさい、
思いわずらうなと語られた箇所である。

テキスト

25 それだから 24節の「神と富とに兼ね仕えることとはできない」という言葉を受けて、その説明として25節以下が語られている。**命は食物にまさり、からだは着物にまさる** 食物や衣服について人間は思い煩うものである。肉体の命を保つために飲食し、服を着て体を外界から守る。どんなに体を大切に扱っても、肉体の命はやがて尽きるものである。この箇所の「命」は、肉体の命を指す(キ)ゾウエーではなく、魂を表す(キ)プシユケーという言葉が用いられている。食物や着物といった地上の物質や肉体の命を考えあぐねるのではなく、神に属する永遠さをも考えよ、とイエスは語られた。

26 空の鳥を見るがよい 見よ、と命令形で記されている。イエスが見よと言われたのは、鳥は働くことのできない無力な存在でありながら、神に養われているという事実である。神の愛は、鳥よりもはるかに優っている「人」に注がれている。**27 わずかでも** (キ)ベークス(キ)ユビトと訳される、45cmに当たる、長さの単位である。寿命や日にちを延ばすという訳となっているが、身長を伸ばすという異訳もある。

28 野の花 花(キ)クリノン)は伝統的に野のゆりとも訳される。しかし、ゆりを特定する言葉ではないので花と訳されている。実際にイエスが見よと語られた花は、ガリラヤでも良く見かけられる

自生のアネモネと言われている。

29 栄華をきわめた時のソロモン イスラエル統一王国第三代ソロモン王。経済面では、地中海の船運、アラビヤへの陸路の通商交易を行い、銅や鉄の精錬も行なった。事績面では、7年をかけて神殿を建設し、未曾有の平和と繁栄の時代を築いた。この**花の一つほどにも着飾ってはいなかった**ソロモンは贅をきわめた豪華な衣を身にまとっていたことであろう。神が装わせてくださった野の花の持つ美しさは、人間の手によるものとは別の次元の美しさである。神は誰の目に触れずに咲く野の花でも、明日、炬で焼かれる野の草でも、顧みていてくださるお方である。

30 信仰の薄い者たち(キ)オリゴピストス)「わずかな」、「小さな」という形容詞オリゴスと、信仰の形容詞形ピストスが結びついている。「ああよく」と、感嘆の言葉として訳されているが、疑問形である。つまり、なぜ小さな信仰なのかとイエスは問われているのである。

32 異邦人が切に求めている 異邦人(キ)エスノス)真の神を知らず、この世の価値観に従い、この世の満足を求めている者たちである。現代日本もそのような姿を示しているよう。あなたがたの天の父は、あなたがたに必要であることをご存じである。神は信仰者の実際の必要を満たしてくださる。神が私たちの羊飼いであり、牧の羊を守り、導くという詩篇23篇1〜2節を参照。

33 まず神の国と神の義とを求めなさい 思い煩うなどという消極的な勧めに代わって、神の国と神の義を求めるという積極的な勧めが述べられている。まず(キ)プロートン)字義どおり、「第一に」、

「最初に」という意味である **神の国** イエスは

宣教の初めに、「神の国は近づいた」と語られた(マルコ1・15)。神の国はイエスの使信の中心にあった。神の国をどう捉えるのかという解釈は時代、立場によって多様である。現代の代表的な考え方を挙げると、A・シユバイツァーは、神の国はやがて来ると、未来的に捉えた。C・H・ドットは、すでに神の国は来たと、実現されたものと捉えている。O・クルマンはイエスによって神の恵みの支配は始まった。神の国はイエスの再臨によって完成すると捉えた。クルマン的な受け止め方が妥当であろう。神の義 神が支配される神の国では神の義が表される。パウロは「神の義」という言葉を、神を信じる者の救いに当てはめている。救いは神の恵みによってなされる。神の義はいかめしい正しさを超えて、恵みと表すことができる。神の国には正しさと恵みが共にあるのである。すべて添えて与えられる 祝福の基礎は、神の前に筋道の立った生き方にある。

34 あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであらう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である 一日の苦労とは、今日一日の労働を指している。今日という日に一生懸命働くことは大切なことである。明日という未来は神に属するものである。明日を思い煩うことは、神がなさることに對して人間が踏み込んでいくことになる。また、明日を思い煩うことによつて、今日の働きさえもおろそかにしてしまう。参考図書 『The Gospel According to Matthew. Leon Morris.(Eerdmans)他

聖書 マタイ6・25〜34
 タイトル し・ん・ぱ・い、バイバイ！
 暗唱聖句 野の花がどうして育っているか、
 考えて見るがよい。マタイ6・28
 目 標 野の花を育て養われる神の愛を
 信じる。

導入

(和田)

今日は「花の日」ですね。みんなはどんなお花が好きですか？何かのお花をじっくり見つめてみたこと、あるかな？花は、私たちの心を慰めてくれます。今日もいろいろなところで、たくさんのお花が贈られ、病気の方々や寂しい思いをしている人々の心を慰めることでしょう。

イエス様が人々にお話しになったとき、そのそばにはきつとたくさんのお花が咲いていたのでしようね。「野の花」のことがお話に出てきましたよ。たくさんのお花が咲いている様子を思い浮かべながら、み言葉を味わいましょう。

空の鳥を養い、野の花を装ってくださる神

イエス様はまず、「空の鳥を見てごらん」っておっしゃいました。「鳥が食べ物心配をしていますか。種をまいたり、刈り取ったり、どこかにため込んだりしていますか。そんなことをしなくても、天の父は鳥を養っておられるでしょう」って。次に、「野の花がどうして育っているか、考えてごらん」っておっしゃいました。「着物の心配などしていいでしょう。それなのに、あのソロモンでさえ、この花ほど美しくは着飾っていませんでしたよ」と。ソロモン王様はだれよりもたくさんの富を手にし

た人で、人の手で造られた豪華な宝ものに囲まれ、きらびやかな飾りもので着飾って暮らしていました。人が造ったどんな美しさも、神様がお造りになった野の花の美しさとは比べ物にならないのです。すごいよね、神様がお造りになったいのちって！

私たちに必要なものを与えてくださる神

イエス様は空の鳥や野の花に人々の思いを向けながら、さらにこうおっしゃいました。「あなたがたは天の父にとつて、鳥よりはるかに価値があるのです。だから、空の鳥さえ養われる父なる神様は、あなたがたを養わないはずがないでしょう？」「今日は咲いていても、明日は枯れて燃やされてしまうような野の花でさえ、神はこれほど心にかけてくださるのです。それならあなたがたのことは、なおさらよくしてくださるはずでしょう？」

考えてみてください。私たちはいろいろなものを神様から「タダ」でいただいています。空気はタダで吸っているでしょう？太陽の光もタダ。水もタダで神様からいただいています。「水道代、払ってるよ！」って？いえいえ、あれは、神様からタダでいただいている水を、みんなのお家まで引っ張ってきて、蛇口をひねれば使えるようにするための手間賃ですよ。食べ物だって、育てて食べるまでの手間賃は払っているけれど、もともととは神様からタダでもらったものですよね。服でも建物でも、取ってきたものに手を加えたり、交換したりして暮らしているのです。そして、この体も、命も、全部、100%神様からタダでいただいたもので生かされているのですよね。私たちは神様に養われているのです。しかも、ひとり子イエス様を十字架につけてまで、私たちを救い、新しく造り

変えてくださいました。

だから、自分たちの力で生きているなんて思ったら大間違い！もちろん、みなさんを育ててくれているお家の方やお世話くださる人々に心から感謝することはすごく大切です。でも、忘れないで！私たちがお家の方たちを備えてくださったのも、あらゆるもので養ってくださったっているのも、全ての命の源である天の父なる神様だつてこと……！

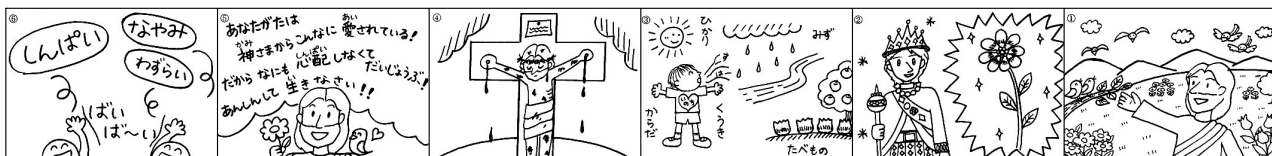
心配するのはやめよう！

イエス様は、空の鳥を養い、野の花を装ってくださる神様のことをお話しになり、「あなたがたも養われているですよ」って語られて、何を伝えたいと願われたのでしょうか？それは、「あなたがたは天の父なる神様からこんなにも愛され、心にかけていただいているのですから、何も心配しなくて大丈夫！神様の愛を信じて安心して生きなさい」ってことなんです！イエス様は繰り返し「思い煩うな」っておっしゃいました。「思い煩う」とは「心配して悩み苦しむ」ことです。神様が私たちのことをちゃんと守りくださっているのだから、心配せず、神様の愛を信じて、神様を第一に生きていけば良いのですね。

結び

まだ来ない明日、未来のこと、そして、心配しなくても良いような小さなことでも、つい心配してしまう私たち……。今日、とつても力強い神様の愛のお約束のみ言葉を知りました。だから、決心しよう！心配にきつぱり「バイバイ」して、軽やかな心で神様を信頼して生きよう！

♪だれがつくったの♪
 (ふくいんこどもさんびか2・7)



聖書 マタイ7・7512 テーマ 祈りに応えて下さる神

序論

(福井)

信仰生活は、聖書を読むことと祈ることによって形成されると言った人がいますが、それは真実であると思う。クリスチャンが成長するには、日常生活の中で、この二つのことを確保することである。この箇所では、イエスは祈りに神が応えてくださることを教えられた(7)。

一、求めよ

イエスは祈り「求めよ」と教えられた。しかも「求める」ということばを一度や二度ではなく、4回も繰り返しておられる(7、8、9、11)。そうすれば、「与えられる」、「見いだす」、「あけてもらえる」と約束された。すなわち、三重の異なった動詞をもって、祈りの確かさを示し、疑いを持つことなく祈り求めなさいと教えられたのである。多くの人々はお祈りをして、それが本当に聞かれるという信仰の確信を持っていないのではないかと思う。このような人々に、本気で打ち込んだ祈りを期待することは無理である。

しかし人はだれでも、銀行では金銭の取り引きが、郵便局では郵便物の手続きが、食料品店では食物を求めることができるのと納得することができる。そのように祈りというものが、神に聞かれ、応えられる確かな営みであると確信している人は、人生のさまざまな事態や問題に直面するたびに、だれから強制されなくても祈るものである。

もし、心底から神に信頼して祈るなら、「求めてくる者に良いものを下さる」天の父なる神は、祈りに応えてくださるのである。

二、求め続けよ

イエスは、落胆したりしないで、目的を果すまで祈り続けなさいと三つの動詞で教えておられる(7)。すなわち、「求めよ」、「捜せ」、「門をたたけ」である。この「求めよ」、「捜せ」、「門をたたけ」ということばは原文通り正しく訳すと、「求め続けなさい」、「捜し続けなさい」、「門をたたき続けなさい」ということになる。すなわち、求めてもすぐに与えられないからと言って、あきらめてはいけない。そうであるならば、もっと自分から積極的に捜してみなさい。それでも見出せなかつたら放っておかずに、手から血が出るまで門をたたき続けなさい、ということである。

そのことはイエスご自身の祈りの生活の中にも見られる。イエスは早朝、人を避けて祈られたり(マルコ1:35)、徹夜で祈られたりした(ルカ6:12)。特に、十字架の前夜のゲツセマネの祈りでは、血のしたたりのような汗を流して祈られた。その祈りは非常に激しいものであったと、ヘブル人への手紙に記されている(5:7)。イエスはこのようなご自分の体験を通して、祈りが神に聞かれるために、「求め続けよ、捜し続けよ、門をたたき続けよ」と、真剣にねばり強く祈ることを教えられたのである。

三、祈りに応えてくださる神

イエスはここで、祈りに応えてくださる神を、子どもの求めに応じる父親にたとえておられる(9、11)。私たちがイエスの御名をもって祈るとき、私たちと神との関係は奴隷と主人や富める者と貧しい者のような関係ではない。父と子との関係であり、しかもこの世の親子関係以上の深い関係である。

自分の子どもがパンや魚を求めた場合、人間である父親の心が墮落して弱さと悪を持ち合わせていたとしても、石やへびを与えるようなことは決してしない。それは父親の愛のゆえである。ましてや、天の父なる神は愛なるお方であり、善にして、人の心を深く洞察できるお方であるから、肉親の父親以上に「求めてくる者に良いものを下さる」お方である。

神は良いものだけをとお与えになるお方であり、神がお与えになるものは、いつも決まって最善のものである。だから私たちは大きな願望をもって神のもとに行き、必要としているものを求め、しかも不動の信仰をもって、神が良いものを与えてくださるようにと願うことができる。神は私たちをこの上なく愛しておられるので、正しく歩む者に害を与えるものは何一つとしてお与えにならないお方なのである。

結論

人間の親子関係でも、子どもは屈託なくどんな心配事でも父親のもとに持って行く。そのように、もっと気安さをもって、祈りに応えてくださる神に祈りをささげるように、イエスは教えられた。

研究資料

(井上)

山上の説教から、求めよ、捜せ、門をたたけという勧めと、黄金律と呼ばれる道徳訓が語られている箇所である。

テキスト

7 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。求めよ (⌘) アイテオー、捜せ (⌘) ゼテオー、たたけ (⌘) クロウオー 訳されたとおり、何れも命令形で記されている。「捜せ」と訳されたゼテオーは、文脈によって「求める」とも訳されている(6・33、「神の国と神の義を求めなさい」の「求めよ」はゼテオーが用いられている)。捜す、たたけという言葉は律法に関して用いられる言葉である。イエスが「求めよ」、「捜せ」、「たたけ」と言われたのは、必死に、一生懸命に、神に祈り求めることである。取り澄ましてお願いするというようなことではない。並行箇所はルカによる福音書11・9〜13である。求めることの例示として、深夜、遠来の友のためにパンを借りに行く人のたとえ話をイエスは語られた。必要のためならば、なりふりかまわず、求めるべきことをイエスは教えられている。

8 すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。イエスは祈りが空しいものではないことを示された。祈りは、神の祝福が開かれていく、素晴らしい業であることを約束されている。

9 パンを求めるのに、石を与える者があるとかパン (⌘) アルトス 日常にはパン種(自然発酵したこね粉を次回用に取り置いたもの)を入れて、発酵させたものを焼いた。祭儀の供え物にはパン種を入れないパンが用いられた。パンは円形、長方形に延ばして焼かれた。パンは形状的には、石に似ていなくもない。

10 魚を求めるのに、へびを与える者があるとか魚 (⌘) イクスース ユダヤ人は、ガリラヤ湖産を始め、多くの魚を食用とした。ここでの魚はガリラヤ湖でとれるナマズの一種と言われる。体が細長くへびに似ている。ナマズであるなら、うろこがなく、律法上汚れた魚であり、食用にはならない。ユダヤ人にとって決して起りえない話である。

11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとするれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるとか 不完全な人間の親であっても、求めてくる子どもには、良い 贈り物 (⌘) ドーマ をしようとする。そうであるならば、完全な天の父なる神が、求めを持つ信仰者に良いものをお与えにならないはずはないと論じられている。ルカによる福音書11・13では、聖霊をくださると語られている。ルカによる福音書では神からの最も良い賜物(たまもの)は聖霊であることを示している。

12 だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。だから とあるように、求めなさいという7〜11節を受けて12節がある。ここに語られているイエスの道徳訓は

黄金律(「ゴールデン・ルール」と呼ばれる。孔子は「人からされたくないことは、人にするな」と論語の中で勧めた。ユダヤのラビたちも孔子と同じことを説いた。人からされたくないことは、人にしないという消極的、否定的な勧めは、一般的な信条として受け止めることができよう。イエスが語ったこの言葉は、否定を肯定に逆転しただけではない、内容的には大きな転換である。人は良い意志を持って、良い行いをするのは難しい。神の愛をいっただいて、神の愛に動かされるなら、積極的な愛の業を人に対して行なうことができる。イエスは律法学者から隣人を愛することについて問いかけを受けた。その答えとして良いサマリヤ人のたとえ話をされた(ルカ10・30〜37)。良いサマリヤ人の姿に黄金律の実践を見ることができよう。イエスによる救いに与り、神の愛に生きて初めて黄金律は具体化される。福音が黄金律を金にしたと言われる。これが律法であり、預言者である。旧約聖書を律法と預言書から成ると捉えた言葉である。旧約聖書全体を指している。黄金律が旧約聖書の成就であるとイエスは語られている。イエスは、律法学者から神の戒めの中で最も大切なものは何かと問われた時、「全存在をもって神を愛すること、自分を愛するように隣人を愛することである」と答えられた(マタイ22・37〜40)。このことに律法全体と預言者がかかっていると締めくくられた。神を愛し、人を愛することが旧約聖書の要約となることが解る。愛は律法を完成するものである(ローマ13・10)。

参考図書 『The Gospel According to Matthew, Leon Morris.(Eerdmans) 他

聖書 タイトル 暗唱聖句 目 標

マタイ7・7～12
信じて祈り求めよう！
求めよ、そうすれば、与えられるであろう。 マタイ7・7
求める者に良い物を与えてくださる父なる神を知る。

導入

(和田)

今日は「父の日」ですね。みんなのために一生懸命頑張ってきてくださったお父さん(あるいは、お父さん役をしていてくださる人)に、心から「ありがとう」っていう気持ちを伝えたいですね。

さて、みんな、今年の初めごろにこんなことを学んだのを覚えていますか？「イエス様は私たちが神様を『アバ！(お父ちゃん、パパ！)』って親しく呼ぶことができるようにしてくださったんですよ」と。だから、この父の日に、私たちをいつも大きな愛で養っていてくださる天のお父様に「ありがとう」と感謝しましょう！

今日は、天のお父様が私たちの祈りに必ず応えてくださるっていう、とってもすばらしい、そして大切なことを学びますよ。

「求めよ！」

みんなはどんな時にお祈りしていますか？お食事の時？朝起きた時や夜寝る前？病気の時？困った時？願いたいことがある時？でも、「このお祈り、天のお父様は本当に聞いてくれているのかな？」って思ったことはありませんか？この世界のすべてをお造りになった神様が、こんなちっぽけな私たちの祈りになんか、いちいち応えてられない

んじゃないかな…」なんて。大丈夫！実は、イエス様が「求めなさい。願い求め続けてごらん！必ず与えられるよ！」っておっしゃったんです。しかも、「少し祈って答えがないからといって、あきらめてはなりません。祈り求め続けるのですよ。そうしたら与えられます！」と。なんて力強い言葉、なんてうれしいことでしょう！天のお父様は私たち一人一人をよく見ていてくださって、私たちが祈り求めるのを待ち望んでいてくださっている、私たちの祈りを、耳を澄ませて聞いていてくださるというのです。だから、「祈ってもいいのかなあ」とか、「祈ったって与えられないかも」なんて考えること、ないんですね！

愛しているからお応えくださる父なる神

「どうして天の父なる神様は私たちの祈りに応えてくださるんだろう…」って不思議に思いますか？実はイエス様が、こんなたとえで天のお父様の思いを教えてくださいます。「パンをねだる子どもに、石ころを与える父親がいるでしょうか。『魚が食べたい』と言う子どもに、蛇を与える父親がいるでしょうか。いるわけがありません。罪深いあなたがたでさえ、自分の子どもには良い物をやりたいと思うのです。だったらなおのこと、あなたがたの天の父が、求める者に良い物をくださらないことがあるでしょうか！」なるほど！確かに、子どもがお父さんにお願しているのに、意地悪をしてその願いにわざと応えない、なんてことはありませんよね。なぜ？愛しているからでしょう！ましてや、天のお父様はひとりイエス様を私たちの身代わりに十字架につけてくださるほどに私たちを愛して

くださらないはずがないですよ！やったー！

答えはいつも「ベスト」

そして、天のお父様の答えはいつも「ベスト」、つまり、一番良い答えなんですって。たとえば、まだ幼い男の子が「お野菜たべたくない。チョコレートだけ食べたい。もっとチョコちょうだい！」っておねだりしたとしましょう。その子のことが大好きなお父さんは、「よし、大好きなお前の願いだ、分かったよ、チョコレートだけ食べなさい、野菜は食べなくていいよ」って言うでしょうか？いえ！もちろん「だめだ！チョコはもうおしまい。野菜を食べなさい」って言うでしょう？どんなに願い求め続けても、大切なその子の健康を思

結び

今まで、お祈りしたって聞かれるかどうか分からない、とか、あまりいろいろ願いたいから神様に怒られちゃうかも、なんて思って、思う存分お祈りすることができなかったお友だちも、今日から、どんどんお祈りしよう！必ず「ベスト」のお答えをもって与えてくださるんですから！

♪祈ってごらん わかるから♪
(ふくいんこどもさんびか2・70)



聖書 マタイ7・24～29 テーマ 人生の土台

序論

(福井)

この箇所は、二種類の「門」と「道」、二種類の「木」と「実」のたとえの後、結びとして二種類の「土台」のたとえを語られた箇所である。それは三重のたとえの結論の部分の結尾であると同時に、5章から7章の「山上の説教」の目指すところを示している。

一、人生には堅固な土台が必要

イエスは最後に、「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と、「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」について話された。

家を建てる時に土台は一番大切な工事である。その家を建てるのに、イエスは岩を土台として建てる人は賢い人であり、砂を土台として建てる人は愚かな人である、と言われた。なぜなら、岩は丈夫なものであり、堅固なものである。だから、「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない」。一方砂は弱く、崩れやすいものである。だから、「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどい」。

このたとえでは、「家は私たちの人生になぞらえられている。したがって、「岩」と「砂」は人生の土台のことである。私たちがイエス・キリストを信じたからといって、ご利益があつて、良いことづくめの生活となるわけではない。イエスを信

じても必ずしも商売繁盛、無病息災になるというわけにはいかないのである。イエスは「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて」と言われ、イエスを信じて、さまざまな人生の嵐に遭い、人生にはさまざまな試練があると言われたのである。

それゆえ、その人生の土台を岩にするか、砂にするかは非常に大切な選択であり、決断を求められるのである。なぜなら、イエスが言われた「賢い人」のように岩を人生の土台とすれば、試練に遭つても、耐えて勝利することができる。また終わりの日の神の裁きの嵐にも耐えることができる。しかし、「砂」を人生の土台とすれば、さまざまな試練は人生を崩壊させ、完全な破滅すらもたらすことになる。だから、人生には堅固な土台が必要なのである。

二、み言葉を聞いて行う

イエスは「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人」と言われた。その「岩」とはイエスの「言葉」であり（イテモテ6・3）、御心であり、イエスご自身である（1コリント3・11）。

ですから「岩の上に自分の家を建て」とは、イエスの言葉を聞いて行うことであり、「聞いて行う」とは聴従することである。そのことをルカによる福音書では「地を深く掘り、岩の上に土台をすえ」（6・48）と言っている。岩の上に堅固な土台をすえるために、土を掘る努力が必要であるが、それはみ言葉を深く掘り下げて学ぶことである。深く掘り下げて学ぶとは、単なる研究ではなく、

聖書の正しい理解を持ち、これを敬い、み言葉を日常生活（個人生活、家庭生活、社会生活、教会生活）に適用して生きることである。また、それは謙虚にみ言葉に聴き従うことでもある。また、神のみ言葉を日常生活に適用することによって、生活の力が与えられる。

その確固たる基盤の上に人生という「家」を建てるのである。しかし、この家にも試練のときがやって来る。「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて」家を打ちつけるのである。これは三重の災難、屋根には「雨」、土台には「洪水」、壁には「風」と大嵐である。しかし「倒れることはない」。理由は「岩」を土台としているからである。

対照的なのは、「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」である。「砂の上に」とは「土台なしで、土の上に」（ルカ6・49）という意味である。試練が来たとき、その「倒れ方」は「ひどい」のである。「ひどい」とは破壊が完全であるという意味で、理由はイエスのみ言葉を聞いても「行わない」からである。

結論

全くみ言葉に聴従している信仰者の生涯において、生活と戦いのハンドルを握られるのは神である。それゆえ、信仰と聴従に徹した生涯は不敗である。その原動力は神であるから行き詰ることはない。なぜなら神よりも強い風はないからである。神の国を心中に経験しているとき、いかなる事にも動じないで、勝利をもって進むことができる。神はこのような生涯に私たちを招いておられる。

研究資料

(井上)

山上の説教も最後の締めくくりとなる。岩の上に建てた家のたとえが語られる箇所である。

テキスト

24 それで (㊦オウン)したがって、それゆえにという意味である。5章から語られた山上の説教の上に立つて結論が述べられる。わたしのこれらの言葉を聞いて行なうもの 預言者たちは神が語られた言葉を伝えた。ユダヤ教のラビたちは先人が語ったことを説くことが多かった。神ご自身であるイエスは、だれの言葉も引用されることはない。イエスがご自分の言葉として神の言葉を語られる。神の言葉を聞いて聞き流すのではない。聞いてそのとおりに行なわなければ、聞いたことにはならない(ヤコブ1:22)。岩の上に自分の家を建てた賢い人 岩 (㊦ペトラ)後にイエスは、ペテロの信仰告白に対して、この岩の上にわたしの教会を建てようと言われた。この岩と同じ語である(16:18)。家 (㊦オイキア)ユダヤ民族は遊牧の時代には天幕生活を送った。カナン定着以降、家を建てて定住することが主になった。庶民の家は石、日干しレンガが主な建材で、多くは1部屋で、平屋造りの小さなものであった。敷地の四隅を掘り礎石を置き、基礎とした(隅のかしら石、エペソ2:20他)のは、大きな家屋や公的な建物であった。家の沈下を防ぐために、時には岩盤まで掘り進んで礎石を置いた。賢い (㊦フィロニモス)聖書は知恵、賢さという概念を幅広く持っている。この場合の賢さは、災害が襲ってき

ても倒れない家を建てるという、処世的な知識を持つ者と受け止められる。

25 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても 洪水 (㊦ボタモス)この語は川を意味しており、複数であり、川々と訳すべきである。パレスチナには雨期だけ水が流れ、普段は川床が現れている川も多い。この語は季節にかかわらず、いつも水が流れている川を指している。雨が降って、通常より増水した様子を表している。岩を土台としている 土台 (㊦セメリオ)聖書は建築物の土台から、より広い意味合いを土台という言葉に持たせている。「山々の基」(申命記32:22)、「地の基」(詩篇18:15)など、自然についても土台の觀念がある。天の都も、地上と対比してゆるがぬ土台を持つものとして記されている(ヘブル11:10)。イエスは、建築物の隅のかしら石救いの土台になったと新約聖書に5回引用されている。教会の土台はイエス(1コリント3:11)であると明記されている。使徒と預言者も教会の土台に加えられている(エペソ2:20)。

26 砂の上に自分の家を建てた愚かな人 砂 (㊦アモス)イスラエルは砂漠地帯に近接しているもので砂はごく日常のものである。砂は数え切れないものの代名詞とされている(創世記22:17)。愚かな (㊦モロス)単純には知恵や賢さの反対を意味するが、聖書は愚かという概念もまた幅広く持つ。砂の上に家を建てることは簡単なことであるが、災害に弱いというもろさを持っている。将来に備えられない愚かさである。

27 倒れ方はひびひ ひびひ (㊦メガレイオテス)

大変に、驚くばかりのという意味であり、完全に打ち倒されることを表す。この世の賢さ、愚かさという尺度で考えれば、時間をかけず、効率のよい、砂の上に家を建てるのが、賢く尊ばれるのかもしれない。時間がかり、効率が悪い、岩の上に家を建てることは、愚かで関心をひかないことでもあろう。危機のとき、試練のときにこそ、何を基としてきたかが問われるのである。

28 イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた イエスが という言葉の前に、原文には2語訳されていない言葉がある。「そして起った」と訳される言葉である。マタイは、イエスが長く話された後に5回この言葉を記している(本節、11:1、13:53、19:1、26:1)。重要なことが語られた時に、定型的に用いられる言葉であると言われる。この言葉を挿入すると、「群衆がその教えにひどく驚いたということが、起った」となる。マタイは、イエスの山上の説教を聞いた群衆が大きな感動に包まれたことを、特記しようとしたのである。終えられる (㊦テリユー)不定過去形が用いられているので、終わったという完了形で訳される。5章から始まり、3章の長さにわたった、語数も内容も豊富な山上の説教が、ここに閉じられた。

29 権威ある者のように、教えられたからである 群衆も律法学者は他から借りた権威であることを知っていた。群衆はイエスの山上の説教を聞いて、イエス自らが権威をお持ちであることが解った。

参考図書

『The Gospel According to Matthew』Leon Morris.(Eerdmans)他

聖書

マタイ7・24～29

タイトル

みことばを聞き行う人

暗唱聖句

わたしのこれらの言葉を聞いて

目 標

行くものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。マタイ7・24 主のみ言葉を堅固な土台として生きる。

導入

(田上)

今聴いた聖書には「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」という言葉が出てきました。岩の上に家を建てるのか、砂の上に家を建てるのかはどういうことだろう？ このお言葉を語られたイエス様は、私たちに何を願っていらつしやるのでしょうか。

それは愚かなこと！

普通、家を建てるるとき、わざわざ砂の上に家を建てる人はいません。岩のようにできるだけ固い所に建てるのです。なぜだか分りますか？ どんなに立派な家でも、砂の上に建てたのでは、家が傾き、倒れてしまうからです。ですから、砂の上に家を建てるということは、だれが見てもまちがったことですね。危険なことですよ。そして愚かなことなんです。

実はそれと同じくらいに愚かなことがあるんです。それは「みことばを聞いても行わない」ことです。これまでに、私たちはイエス様の語られた言葉を幾つも聞いてきたでしょう。その言葉を聞

いても行わないということは、砂の上に家を建てるぐらいに危険で間違ったことなんです。そうならないようにするためにはどうする？ 「みことばを聞いて行う」人になればよいのですね。

みことばを聞いて行う者

イエス様は、「みことばを聞いて行う」人のことを「岩の上に自分の家を建てた賢い人」に似ていると言われました。みことばどおりに生きて行こうとするのは、賢い生き方なんです。そして、みことばを行っていると、つらいことや悲しいことがあっても、立ち直って、強く生きることができるようなんです。

ある女の子の話です。学校に行くと、いつも意地悪をしてくる子がいました。女の子は意地悪されるのが嫌でしかたがありません。そんなとき、女の子は「だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」というイエス様の言葉を聞いたのです。そして、意地悪をされたら、嫌な顔をするのではなくて、ニッコリ笑おうと、「微笑返し」を決心して、実際にそのように行いました。すると、意地悪をしていた子は、最初は馬鹿にされているのかと思ったようですが、ある時から、意地悪をしなくなったそうです。

この女の子にとって、みことばを行うことは簡単なことではなかったでしょう。しかし、女の子なりに、みことばを行おうと「微笑返し」を続けたことで、自分が守られ、また意地悪をしていた子とも仲良くなることができました。この女の子は、「岩の上に家を建てる賢さ」に生きたのです。

聞く耳をもつこと

「みことばを聞いて行う」ためには、まず、みことばを本気になって、心を開いて、誠実に聞かなければなりません。

お母さんが「〇〇ちゃん。机の周りを掃除しなさい」というのを聞いて「はい、はい、わかったよ！」などと返事をしても、実際には掃除をしない場合があるでしょう。そういう時というのは、お母さんの言葉は、耳の中を素通りしていくようなもので、何も聞いていないのと同じです。聞いているようで実際には聞いていないのです。ほんとうに心を開いて聞いていたら、いいかげんな態度はとらないものです。

「みことばを聞いて行う」ということも、心を開いて、真剣にみことばを聞くことができていたら、「みことばを行おう、実践しよう」という気持ちになるんです。そういう気持ちを神様が与えてくださるのです。

岩の上に家を建てるためには、地中の岩盤に届くまで杭を打ち込んだりする努力が必要です。それと似たように、みことばを聞くためにも努力が必要です。日曜日の朝、早起きをして教会学校や礼拝に遅れないようにすることも、みことばを聞くための大切な努力です。ルターという人は、聖書を正しく理解して学ぶためには、聖書を聞く前に、祈ることから始めなさいということを言いました。私たちの耳が、みことばをまじめに聞く耳となるように、そして、みことばを聞いて行う人になることができるように祈りましょう。

♪ガリラヤの風かおる丘で♪ (新聖歌40)



牧羊ひろば



羽ノ浦キリスト教会・教会学校

はじめに

羽ノ浦キリスト教会は、昨年創立50周年を迎えました。羽ノ浦町は、四国徳島県の南部に位置し、田園風景の広がる、のどかで温暖な地域です。徳島市へ車で30分という利便性もあり、住宅地として人気があり、人口1万2千人の町にしては、住みやすくまとまっています。

羽ノ浦教会の教会学校も、昔は、分校が三つほどあり、大勢の子どもたちが集う集まりであったようですが、現在は、クリスチャンホームの子ども、あるいは、どちらかの親がクリスチャンの子どもが中心になっています。人数も、現在、常連のメンバーは、幼小科7人、中高生科7人の、合わせて14人で、新しい子どもへのアプローチに課題があります。

毎週の教会学校

〈幼小科〉

毎週日曜日の朝9時から、10時までが教会学校です。賛美や、献金の後、全体でのメッセージが

あり、その後、分級でみ言葉カードを貼^はり、小学生はワーク、幼稚科は工作などをします。全体メッセージは、4人の教師が、交代で準備して語ります。数年前から復活し、大切にしているのは、暗唱聖句で、毎月一つのみ言葉を覚えさせます。3歳のお友だちが、一生懸命みんなと一緒に覚えようとする姿にいつも励まされ、小学生たちも、頑張っているところです。

カード帳が一杯(52枚)になると、千円までのプレゼントがもらえるというのも、人気です。

〈中高生科〉

毎週9時半から、聖書研究のようなスタイルで中高生科をしています。今日のテキストの箇所をみんなで輪読した後、教師の質問に答えながら理解を深めていきます。が、このころ、集合時間が遅れ気味で、なかなか自分たちで考え、聖書から導かれるということが難しく、教師が答えを提示することが多いということです。中高生科には、献金はなく、ジュースなどを飲みながら、リラックスして行い、できるだけ、その後の礼拝に出席するように勧めています。

昨年は、その中から、1名の高校生が、一昨年は、3名が受洗に導かれました。本当に感謝です。幼い時から育てられた子どもたちが、確実に捕えられ、主に従いゆく者とさせていただけるよう、これから、祈りつつ奉仕させていただきます。

また、子どもの信仰の成長や、信仰告白のために、四国教区で持たれているバイブルキャンプが、

大いに用いられている事も、感謝をもって、あわせて報告させていただきます。

年間行事

〈工作教室、料理教室〉

一年間に2、3回だけですが、土曜日に、工作教室や、料理教室を行い、いつもは教会学校に來ていないお友だちも参加しやすい場にした、と考えてきました。

昨年冬には、生キャラメル作りをし、好評でした。その他今までに、料理では、クッキー、蒸し



工作教室・生キャラメル作り



一日夏期学校・ダンボール工作

毎年、8月上旬1泊2日で、キャンプをしています。1時間弱で行ける野外活動センターは、自然に囲まれ、使い勝手も

毎年1回、ゴールデンウィークに、お弁当持ちで、森林公園や海岸へ出かけています。教会学校生徒だけでなく、教会全体に呼びかけ、いろいろな世代の人たちで、出かけることが多くなりました。春の一日をのんびり楽しく過ごします。

パン、肉まん、そば打ち、げんこつあめ、チョコレートトリュフなど。工作では、案山子づくり、竹馬づくり、リース作り、独楽、凧、ドングリころがし、など、いろいろなアイデアで、楽しい時を持ちました。新しい子どもも参加してくれるのですが、教会学校につながるというところまでは、なかなか行かない現状です。講師には、教会学校教師の同僚や友人、教会とつながりのあるノンクリスチャンの方々も、沢山協力してくださいます。

〈遠足〉



一日夏期学校・焼パン作り

上げるための分級を、準備してきました。キャンプファイヤーやキャンドルサービスでは牧師先生に語っていただき、普段と違う環境のなかで、神様のお話を聞きます。と、同時に楽しいプログラムも多く、特に工作の時間は、普段はできない大がかりなことにも取り組みました。ペットボトルロケットを飛ばしたり、大きなビニールロケットを作ったり、あるいは、いろいろな講師の方をお招きしてのストーンアート、木工細工、紙粘土づくり等々が、こどもたちに、楽しい思い出を与えてくれました。バーベキューや、みんなで手伝う食事作りも楽しみの一つです。

よく、度々利用させてもらっています。例年、教師会で、テーマを決め、子どもたちに伝えたい聖書箇所から、2回のメッセージと、掘り下げ



子どもクリスマス会



子どもクリスマス会

が完成しました。昼は教会のガレージでバーベキューや焼きパンを楽しみました。はじめは小学生対象だったキャンプでしたが、成長してきた中高生や大学生が、参加するようになり、リーダー的存在となつてゲームや工作を盛り上げてくれました。初めての子どもも5名ほど加えられました。

〈子どもクリスマス〉

秋になると、子どもクリスマスのための準備を始めます。昨年は、以前の子どもたちが作った人形を使い、放蕩息子



子どもクリスマス会

ました。いつもの教会学校の中で準備を進めるので、時間が足らず、いつもはらはらしますが、本番では、毎回上手くまとまるのが不思議です。12月の第二土曜の午後に、子どもクリスマス会をしました。



クリスマス会・マジックショー

す。羽ノ浦町の小学校2校に前日チラシを配り、呼びかけます。昨年は40名の子どもたちが参加し、感謝でした。福田勝敏先生のクリスマスメッセー

ジに耳を傾け、真剣に聴く子どもたちの顔が印象的でした。そして、ゲストによるマジックショーで楽しみました。そこから新しくつながる子ども

今後の祈りと課題



中高生食事会

「中高生食事会」毎年春とお正月の2回、教会学校教師宅で、食事会をし、トランプやウノなどで親睦を図ります。

① 今、与えられている子どもたちに、毎週の教会学校を通して、神様の愛と真実を心から伝え、子どもたち一人一人が「私の主、私の神」と告白し、自らの信仰へと結びつけられるように祈ります。

② 新しい子どもたち、保護者へのアプローチの方法を開拓すること。特に今、感謝な事に、新会堂の計画が進められています。この機会に良き方法が与えられるように祈ります。

③ 新しい奉仕者が与えられるように。現在、奉仕者は幼小科4名、中高生科2名ですが、皆、中高年です。今、新しい方が与えられそうに感謝しています。奉仕者として、成長され、次の時代を担ってくださるよう祈ります。

(文責 多田みどり)

「おわりに」

『牧羊者』二〇一〇年度第一巻をお届けできまことを感謝します。執筆の方々には、年末年始のあわただしい中を執筆していただき、心から感謝いたします。まず「二〇一〇年度カリキュラム解説」を記し、教師養成講座には、日本ホーリネス教団 東京中央教会牧師の錦織寛先生の「説教：子ども心をつかむお話し(2)」を掲載させていただきました。

牧羊ひろばでは、羽ノ浦キリスト教会のこれまでの歩みと、現在の活動状況を紹介していただきました。終わりに今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解 水川武志師 大頭眞一師 福井文彦師 研究資料 中島啓一師 宮澤清志師 井上義実師 メッセージ例 松浦みち子師 飯田勝彦師 和田治師 田上篤志師

ワーク(A) 吉田美穂師 鎌野 幸師

(B) 野勢かほる師 佐藤直哉師

(C) 小泉 創師 田代美雪師

(D) 上森恭子師 竹崎光則師 杉山俊一師 (中高科) 朝川清英師 石田高保師

子ども聖書日課 小野淳子師

フラッシュカード 土屋直子師 藤井洋美師

イラスト 伊中めぐみ師 テープ起し 長尾明美師

ワープロ打ち込み 楠淳子師 長尾明美師

校 正 長田栄一師 光田隆代師 加藤 清師

また、陰で労してくださった各師と兄弟姉妹、ワーク印刷と発送のペラカ出版、印刷のあくもと菱三印刷に心から感謝いたします。(長尾秀紀)

聖書教育 教案誌 牧羊者

二〇一〇年度 I巻

二〇一〇年四月一日発行

発行所 有限会社 ペラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三三三一九

電話(〇七八)五七五五一一

FAX(〇七八)五七五五一一

印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六六三九六一

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み